

上ノ原横穴墓群

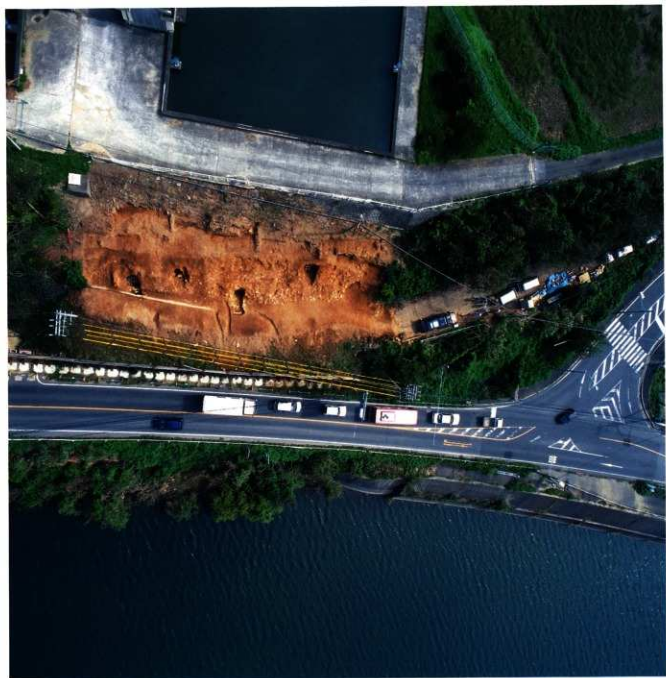
国道212号交通安全工事に係る埋蔵文化財調査報告書

2006

大分県教育庁埋蔵文化財センター

上ノ原横穴墓群

国道212号交通安全工事に係る埋蔵文化財調査報告書



調査区全景

序 文

本書は、大分県教育委員会が国道212号交通安全工事に伴い、大分県中津土木事務所の依頼を受けて実施した中津市三光に所在する上ノ原横穴墓群の発掘調査報告書です。

中津市三光は、調査当時は下毛郡三光村でしたが、平成17年の市町村合併により、現在は中津市三光となりました。中津市は、大分県の北西端、福岡県との県境に位置しており、史跡福沢諭吉旧居をはじめ、生産遺跡として知られている伊藤田窯跡群など数多くの遺跡が点在しています。

今回調査を行った上ノ原横穴墓群は、福岡県と県境をなす山国川右岸の下毛原丘陵西斜面に位置し、1980年代に行った調査では横穴墓群の形成や古代の家族構成を解明する上で、多大な成果をあげています。

今回は4基の横穴墓の調査を行い、7体の人骨が出土しました。この資料の分析により、さらなる成果の追加を果たすことができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、調査に御協力をいただきました関係各位及び地元の皆様に対して、衷心から感謝申し上げます。

平成18年2月28日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 洪 谷 忠 章

例 言

1. 本書は平成16年度に実施した国道212号交通安全工事に係る上ノ原横穴墓群の調査報告書である。
2. 調査は大分県教育委員会が大分県中津土木事務所の依頼を受け実施した。
3. 遺構・遺物の実測と写真撮影は高橋徹・友岡信彦・吉田朋史・谷尊祥と玉川剛司（別府大学大学院）が行った。遺物の実測・製図は調査員のほかに、埋蔵文化財センターで行った。なお、出土人骨の実測・浄書は、九州大学大学院比較文化研究院基層構造講座の田中良之教授・舟橋京子研究員・小田祐樹（現独立行政法人奈良文化財研究所）に依頼した。
4. 出土人骨の鑑定については、九州大学大学院比較文化研究院基層構造講座に依頼した。
5. 本書で用いた方位はすべて真北である。
6. 本遺跡出土の遺物及び関係資料は大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
7. 本書の執筆・編集・構成は高橋徹・友岡信彦・吉田朋史・谷尊祥で行った。

本文目次

第1章	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
第2章	遺跡の立地と環境	1
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	1
第3章	調査の成果	3
1.	遺跡の概要	3
2.	各横穴墓の報告	5
第4章	出土人骨について	27
第5章	まとめ	36

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図	2
第2図	各部位の名称及び横穴墓の分類表	3
第3図	上ノ原横穴墓群遺構配置図	4
第4図	1号墓実測図(1/40)	5
第5図	1号墓出土遺物実測図1(1/3)	6
第6図	1号墓出土遺物実測図2(1/2)	9
第7図	1号墓出土遺物実測図3(1/2)	10
第8図	1号墓出土遺物実測図4(実大)	11
第9図	2号墓実測図(1/40)	14
第10図	2号墓出土遺物実測図(1/2)	15
第11図	2号墓出土人骨実測図(1/10)	15
第12図	3号墓実測図(1/40)	16
第13図	3号墓出土遺物実測図1(1/3)	17
第14図	3号墓出土遺物実測図2(1/2)	17
第15図	3号墓出土人骨実測図(1/10)	18
第16図	4号墓実測図(1/40)	20
第17図	4号墓出土遺物実測図1(1/3)	21
第18図	4号墓出土遺物実測図2(1/2)	22
第19図	4号墓出土遺物実測図3(実大)	23
第20図	4号墓出土人骨実測図	24

表 目 次

表1	1号墓出土土器觀察表	8
表2	1号墓出土鉄器計測表(1)	11
表3	1号墓出土鉄器計測表(2)	12
表4	1号墓出土玉類・銅製品計測表	13
表5	2号墓出土鉄器計測表	15
表6	3号墓出土土器觀察表	19
表7	3号墓出土鉄器計測表	19
表8	4号墓出土土器觀察表	22
表9	4号墓出土鉄器計測表	25
表10	4号墓出土玉類計測表(1)	25
表11	4号墓出土玉類計測表(2)	26

図 版 目 次

図版1	1号墓全景 1号墓閉塞石
図版2	1号墓玄室 1号墓遺物出土状況
図版3	2号墓全景 2号墓閉塞石 2号墓玄室
図版4	3号墓全景 3号墓閉塞石板石 3号墓遺物出土状況
図版5	3号墓人骨検出状況
図版6	4号墓全景 4号墓前底部遺物出土状況 4号墓閉塞石
図版7	4号墓玄室 4号墓人骨検出状況 4号墓遺物出土状況
図版8	1~4号墓出土遺物(須恵器・土師器・鉄器)
図版9	1号墓出土遺物(鉄器)
図版10	1号墓出土遺物(鉄器)
図版11	1・4号墓出土遺物(玉類)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

国道212号交通安全工事に係る工事予定地は、山国川右岸の丘陵斜面に位置する。この国道212号は中津市と日田市を結ぶ県西北部の主要幹線道路として重要な役割を果たしている。しかし、近年の交通量の増加に伴い、慢性的な交通渋滞を引き起こしていることも事実であり、歩行者等の安全性も確保が難しくなっている。

このため大分県中津土木事務所では、平成10年度に国道212号の渋滞解消と交通の円滑化を図るため、交通安全工事に着手することになった。

事業開始に伴い、大分県中津土木事務所から分布調査の依頼を受けた大分県教育委員会文化課は、本工程が遺跡所在の可能性が非常に高い地域であることから、事前の試掘調査の必要な地区であると回答した。これをうけた中津土木事務所では、用地買収などの条件が整った対象地区ごとに試掘調査の依頼を県文化課に行い、平成13年度から調査を実施している。平成13年度は2次にわたって八幡鶴市神社周辺の坂手前遺跡の調査を実施した。平成15年度は、4月に坂手隈横穴墓群の調査、7～8月には坂手隈城跡の調査を実施している。平成16年度は5月に、上ノ原横穴墓群の立ち合い調査を行い、2基の横穴墓を検出した。この結果を受け、平成16年7月から本調査を実施することとなった。

上ノ原横穴墓群の本調査は、平成16（2004）年7月1日から平成16年10月22日の間実施した。

2. 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	深田 秀生
調査委員	九州大学大学院教授	田中 良之
	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	伊藤 正行
調査員	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長	高橋 徹
	大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹	栗田 勝弘
	大分県教育庁埋蔵文化財センター副主幹	友岡 信彦
	大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託	吉田 朋史
	大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託	谷 尊祥

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

上ノ原横穴墓群の立地する中津市は大分県の北部に位置し、福岡県と県境を接する。調査時は下毛郡三光村大字佐知であったが、平成17年4月1日付で中津市・三光村・本耶馬溪町・耶馬溪町・山国町と1市3町1村の合併を行ったため、現在の行政区画は中津市三光佐知である。

遺跡の立地するこの地域は、周防灘に面する豊前平野の東部（中津平野）に位置し、山国川を眼下に見下ろす海拔30m前後の洪積世台地上（通称下毛原丘陵）に位置する。

上ノ原横穴墓群は、山国川右岸の下毛原丘陵西側の斜面縁辺部に沿って構築されている。当遺跡は、旧三光村役場付近から続く上ノ原横穴墓群の北端付近にあたる。上ノ原横穴墓群と接してさらに北側には、坂手隈横穴墓群が立地する。いずれも一連の横穴墓群である。

2. 歴史的環境

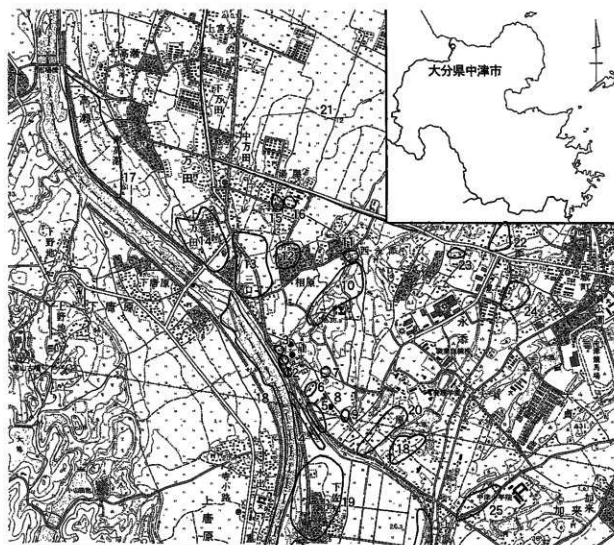
本遺跡を含む山国川流域には極めて濃厚な遺跡の分布が見られる。旧石器時代の遺跡数は少ないが、洞ノ上遺跡や上ノ原遺跡で細石器や剥片等が出土している。

縄文時代になると、遺跡の数は膨大し、早・中期には枋洞穴や、陥穴が検出された黒水遺跡などがある。後・晩期になるとボウガキ遺跡や、穂野貝塚、佐知遺跡、土偶が出土した高畑遺跡などが知られている。

弥生時代になると遺跡の範囲は拡大していき、沖積平野内の低地にも遺跡が確認されるようになってくる。前期～後期初頭までの集落跡が検出された森山遺跡や、上万田遺跡、山国川沿いの佐知遺跡等が知られている。

古墳時代になると、沿岸部や山国川沿いには、今回調査を行った上ノ原横穴墓群をはじめとする横穴墓群や古墳が築かれるようになってくる。沖積平野の低湿地では水田跡が確認されている。また、生産遺跡としては、大規模な窯跡として伊藤田窯跡群が確認され、一部調査が行われている。

古代においては、当地区は豊前の下毛郡に属していたが、それ以前には福岡県築上郡とともに三宅郷に属している。正合院文書（大宝2年・702年）には上毛郡の記載があり、上毛郡（福岡県）・下毛郡（大分県）に分割されている。この時代の特徴的な遺跡としては、寺院が出現する。相原廃寺、塔ノ館廃寺や、築上郡吉富町垂水廃寺などが挙げられる。また、長者屋敷遺跡は下毛郡衛に付随した正倉と目されている。



1 坂手隈城跡	6 弊旗邸古墳群	11 法華寺遺跡	16 市場遺跡	21 沖代地区条里跡
2 坂手隈横穴墓群	7 相原古墳群	12 相原廃寺	17 高瀬遺跡	22 梶屋遺跡
3 坂手隈横穴墓群	8 上人塚古墳	13 三口遺跡	18 大池南遺跡	23 永添中園遺跡
4 上ノ原横穴墓群	9 柳ヶ池池東遺跡	14 上万田遺跡	19 佐知久保畑遺跡	24 八並城跡
5 菊助野地遺跡	10 台遺跡	15 榎永城跡	20 六献町遺跡	25 清水郎西遺跡

第1図 周辺主要遺跡分布図

第3章 調査の成果

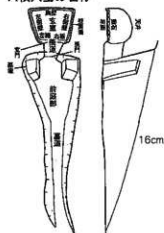
1. 遺跡の概要

上ノ原横穴墓群は、昭和30年頃に行われた土地造成によって発見され、一部は地元篤士によって保存されていた。その後、一般国道10号線改良工事として計画された北大道路建設工事による事前調査で、昭和56年から昭和60年にかけて総数81基の横穴墓群の調査・報告が行われた。この調査によって、横穴墓群の形成や古代の家族構成員に、多大な成果をあげている。

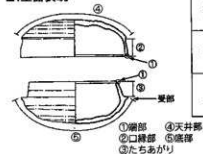
今回の調査区は前回調査区の北側にあたり、標高30~33mの間に4基の横穴墓を検出・調査した。標高30m以下の斜面部分は、国道212号の建設により削平を受けて存在しない。当調査区からさらに北側に延びる斜面は板手隈横穴墓群と呼ばれ、山国川右岸に面するこの下毛原丘陵西側の斜面一帯は、横穴墓の一大墓域である。

前回調査区は、斜面の勾配が比較的緩やかであり、横穴墓形成時の墓域占有における規則性が認められたが、今回の調査区は勾配が急であり、横穴墓の規則的な構築形態はみられなかった。

1. 横穴墓の名称



2. 土器表現



3. 横穴墓平面図の分類

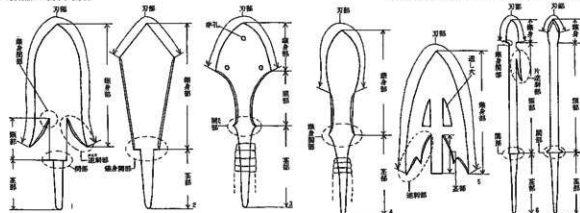
	平面図の分類										
	方形				妻入り(長方形)			平入り(長方形)			小形
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
1	正方形	横長の正方形	縦長の正方形	正方形	横長の正方形	縦長の正方形	横長の正方形	縦長の正方形	横長の正方形	縦長の正方形	小形
2	横長の正方形	縦長の正方形	正方形	横長の正方形	縦長の正方形	横長の正方形	縦長の正方形	横長の正方形	縦長の正方形	横長の正方形	小形
3	横長の正方形	縦長の正方形			横長の正方形	縦長の正方形		横長の正方形	縦長の正方形		横長の正方形
4	正方形				正方形						

天井形の分類

	天井形の分類							
	寄棟形 a	鴨居形 b	切妻形 c	四角錐形 d	尖頂 アーチ形 e	平形 f	アーチ形 g	ドーム形 h
横断								
縦断								
上面								

「九州の横穴墓と地下式横穴墓」より転載

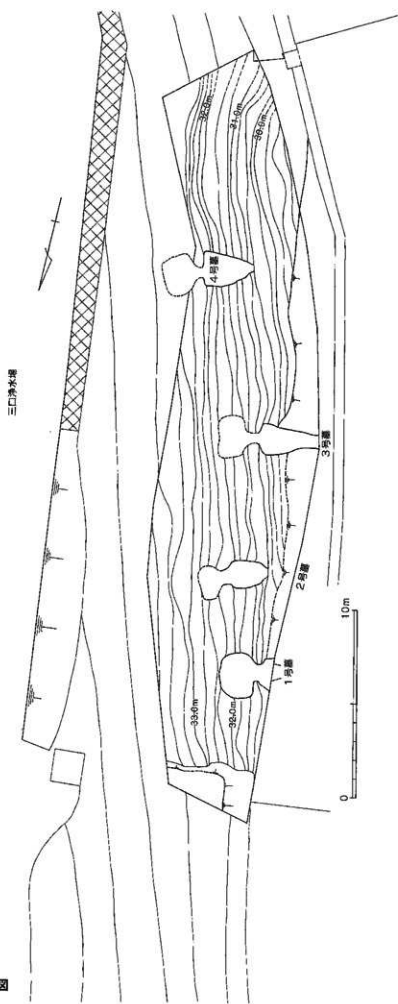
4. 鉄鏝の各部名称



「古墳時代の鉄鏝について 杉山秀宏」より転載

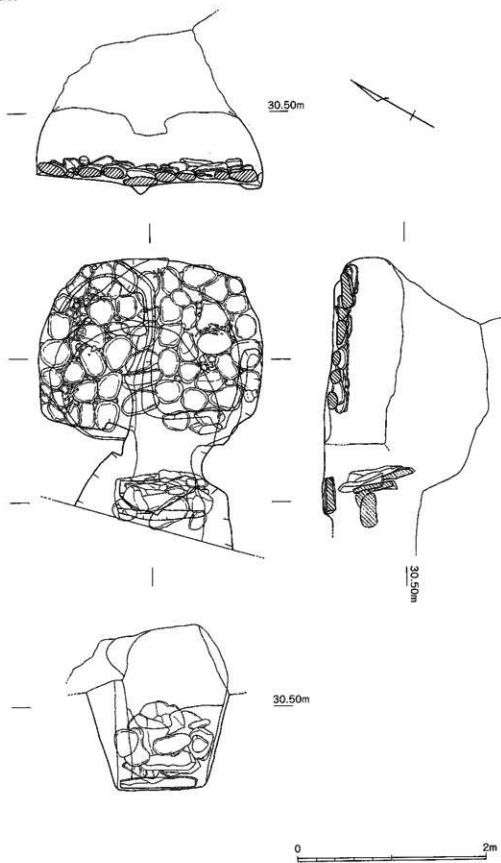
第2図 各部位の名称及び横穴墓の分類表

第3図 上ノ原横穴墓群遺構配置図



2. 各横穴墓の報告

1号墓



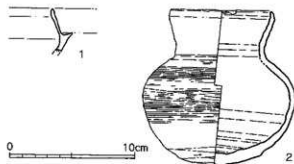
第4図 1号墓実測図(1/40)

1. 立地、調査前の状況

1号横穴墓は、調査区の北側に位置し、南東方向に開口する。斜面の中位、標高30m付近に構築されている。残存長は約3mで、主軸方向はN-60°-Eを示す。

調査以前は、墓道と前庭部の大半が近年の造成により削平を受け、玄室は崩落していた。

調査は、最初に残存している前庭部プランの確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落埋土の除去作業を行い、遺物、礎床施設などの調査を実施した。



第5図 1号墓出土遺物実測図1 (1/3)

2. 規模・構造

1) 前庭部、羨門部 (第4図)

前庭部は床面で、長さ約0.6m、幅約1mが残存している。羨門壁の傾斜は陥没のため明確ではないが、約70°~80°である。埋土は削平が激しく把握するに至らなかった。羨門部は崩壊により旧状を失っている。断片的に残っている部分を復元すると、幅約0.6m、高さは約0.7mである。

閉塞施設は板石と河原石を使用し、羨門部を覆うように構築されている。閉塞の配石は二工程に分けられる。まず、5枚の板石で羨門部を覆い、その後、河原円礫で下半部を覆うように構築している。羨門部の床下からは安山岩板石1枚が検出された。この板石裏面には、赤色顔料が塗布されており、追葬時に取り除かれた閉塞施設の一部と考える。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.65m、長さ約0.8m、床面はほぼ平坦である。玄室幅は床面で0.7mである。玄室は崩落しているが、天井部は残存状況からアーチ形、床面は隅丸形状を呈し、長さ1.97m、幅2.40m、高さ0.87m以上である。玄門方面へ向って緩やかに下降する。床面は奥壁中央部分に排水溝を設け、左右にそれぞれ礎床を構築している。床面には人頭大の扁平河原石を敷き詰め、枕石を配置している。頭部は枕石の位置から推測して東側と考えられる。礎床の構築順は、最初に中央の排水溝に河原石を敷き、その後左右礎床を作り、隙間を5~10cm前後の河原石で補填している。

3. 遺物の出土状態

1) 前庭部 (第5図)

前庭部はほとんどが削平を受けており、閉塞施設部分だけの残存である。出土した遺物は数点の須恵器片と土師器片である。いずれも細片で、図示できるのは1点である。

1は須恵器坏身である。立ち上がりから受部にかけて残存している。立ち上がりは内傾している。受部はやや外上方に肥厚している。口縁端部はやや丸みをおびる。分量については、残存状況が悪いため不明である。

2) 玄室内

玄室内は天井部崩落のため、多量の土砂が流入していたが、清掃後は人骨片と多くの副葬品が出土している。人骨は残存状態が悪く、頭蓋骨や大腿骨が部分的に残存していた。北側礎床玄門寄りでは人骨の一部が、片付けられた状態で検出された。副葬品は土器、鉄器、玉類、銅製品が出土している。

土器は1点で、2の須恵器短頸壺である。玄室南壁の玄門寄りの位置で出土した。この壺は口縁端部を意図的に打ち欠いており、埋葬時の葬送儀礼の一種と考えられる。口縁部はやや内傾し、丸みをおび、口縁端部は打ち欠いている。口縁部から頭部にかけては、回転ナアを施している。頭部から胴部下半外面にはカキメによる細か

い凹凸がみられ、カキメの後ナデ消しを施している。底部は回転ヘラケズリを施している。時期については6世紀後半の所産と考えられる。

鉄器はまとまって出土し、大きく4つの支群に分かれる。第1・第2支群は玄室南側から、第3支群は玄室北側から、第4支群は玄室東側から出土している。1号墓出土の鉄器は総数40本、鹿角製装具刀子2本、刀子1本、鉄鎌1本である。

①第1支群出土鉄鎌（第6図 1～19）

第1支群出土の鉄鎌は平根式1と長根式2～19の合計19本が出土している。

平根式1は、鎌身部の形態が腸扶長三角形になる。この鉄鎌は、一度内湾して外に広がり腸扶を形成する。

長根式は、鎌身部の分類が可能なものは2～8である。独立方逆刺長三角形2と長三角形3～5と三角形6～8に分類が出来る。独立方逆刺長三角形以外の6本については鎌身関節が両角式になり、独立方逆刺長三角形は片方だけ逆刺になり関節は7本全てが台形関節になる。9～19の鉄鎌においては、鎌身部が欠損している為に分類が出来ない。第1支群鉄鎌は礎床の上に東になって置かれており、鎌身方向は揃えられていない。

②第2支群出土鉄鎌（第6図 20～26）

第2支群鉄鎌は長根式のみ7本が出土している。鎌身部の分類が可能なものは20～23である。鎌身部の先端が丸い刃を付ける長三角形20と鎌身部の先端が鋭利になる長三角形21～23に分類が出来る。また、鎌身関節は4本ともは両角式になる。21～23については鎌身部の長さにより細分化が可能で、2種類に分類が可能である。鎌身部の長い方が21、短い方が22、23である。鎌身関節に関しては両角式になり、関節に関しては21が台形関節を造るが22、23ともに欠損している為に不明である。

24は頸部と基部だけの残存である。関節には両角関節になる。25～26は基部だけの残存である。

第2支群鉄鎌は第1支群のすぐ南側から出土している。第1支群鉄鎌は礎床の上に東になって置かれていたのに対して第2支群鉄鎌は敷石と敷石との間から出土していて、全体的に鎌身を西側に向けている。

③第3支群出土鉄鎌（第7図 27～30）

第3支群出土鉄鎌は平根式27と長根式28～30の合計4本が出土している。平根式と長根式とも鎌身部の分類が可能である。

平根式27は鎌身部の形体が特徴的で主頭形の流れを組む鉄鎌であると考えられるが、はっきりとした分類は難しい。鉄鎌には、一部分に繊維痕が錆となり残存している。繊維痕には経糸と緯糸を織り合わせている面が確認出来る。この織物を形成する糸は部分的に燃りをかけているのが確認でき右燃りであり経糸と緯糸を交互に交叉させる事から平織物であると考えられる。関節に関しては錆の為に確認が出来なかった。

長根式については、鎌身部の形態は長三角形になる。鎌身部の長さの違いにより細分化すると2種類になる。鎌身部が短い方が28、長い方が29、30である。関節に関しては3本とも台形関節を造る。

第3支群鉄鎌は人骨などを寄せ集めた玄室北側礎床の奥壁近くから出土しており、鎌身方向は揃えておらず散在していた。

④第4支群出土鉄鎌（第7図 31～34）

第4支群出土鉄鎌は平根式31と長根式が32～34の合計4本の鉄鎌が出土している。

平根式31は鎌身部が全体的に幅広の造りをしている。31は第1支群で出土している平根式1と腸扶を造るところは似たような特徴を示すが、鎌身部の造りが異なり平根式1は全体的に細身の造りをしている。形態は1、31ともに同じ腸扶長三角形である。

長根式は、3本の中で鎌身部の形態が確認出来るのは32、33だけである。この2本は、三角形32と長三角形33に分類が可能である。鎌身関節には2本とも両角式になり、三角式の関節については台形関節を造る。長三角式は欠損しているため確認が出来ない。

34の鉄鎌は頸部だけの残存である。刀子の一部と考えられる鉄器が付着している。

第4支群鉄鎌は玄室内中央にある排水施設の東側奥壁の敷石を取り除く段階で出土した。鎌身方向は揃えてお

らず散在していた。

⑤各支群以外の出土鉄鏃（第7図 35~44）

35は鏃身部の形態は方刃箭形で片方に逆刺を造る。逆刺が初期に見られる鉄鏃よりも小さく簡略化されており、関部には台形関を造る。37は玄室南側の敷石の下に潜り込む様な状態で出土している。

36は鏃身部の形態は長三角形である。鏃身関部は両角式になり関部は台形関になる。この鉄鏃は人骨を取り除く段階で出土した。

37は鏃身部の先端部が一部欠損している為に形態は不明である。鏃身関部は両角式になり、関部には台形関を造る。玄室中央の排水施設の東側奥壁の敷石近くから出土しており、第4支群鉄鏃よりは少し北の位置である。

38は鏃身部の形態は長三角形である。鏃身関部は両角式になり関部には台形関を造る。

39は鏃身部が欠損している為に形態は不明である。関部には台形関を造る。

40は鏃身部が欠損している為に形態は不明である。関部には台形関を造る

38~40は土壌洗浄中に発見された為に正確な出土位置は不明である。

⑥その他の鉄器

41~43は刀子である。41の刀子は刃部先端が欠損しているが、刃部の一部と基部が残存している。また、把部には鹿角製装具を装着している。玄室中央の排水施設の東側奥壁の礎床近くから出土している。

42も41と同じような残存状況であるが41よりも大型である。把部に鹿角製装具を装着している。第2支群から出土している。

43は1号墓出土の中で最も大きな完形の刀子である。刃部先端には繊維痕が残り、この繊維痕を観察すると経糸と緯糸を交互に交差させている事から、この繊維痕も平織物であると考えられる。また、平織物の面が2つ重なる状態が確認でき織物によって巻かれていた事が伺える。刃部に繊維が直接残るということから、抜き身の状態で織物によって巻かれていたと思われる。この刀子は玄室北側部分の追葬段階の片付けにより人骨や鉄鏃などが寄せ集められたと考えられる場所から出土している。

44は鉄鏃で完形である。刃部が湾曲する刃を付けるタイプの鉄鏃である。出土位置は、玄室南側の敷石の上に置かれていた。

玉類は、ガラス製の丸玉11・小玉23個の合計34個が出土した。いずれも埋土の洗浄中に出土したもので、出土位置は不明である。

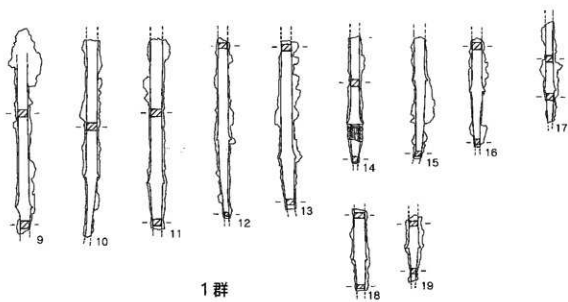
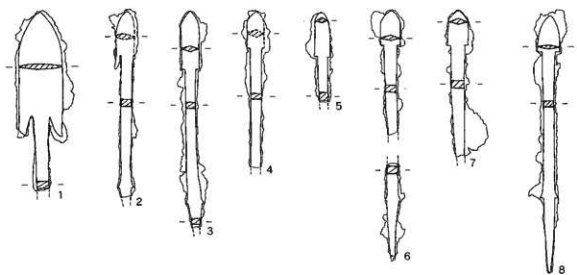
その他、銅製品の飾り具とみられるものが1点出土している。人骨片は玄室左側の玄門寄りに寄せられており、追葬時にかたづけられたものであろう。

以上のことから、前庭部の削平により埋土での追葬ラインは確認できなかったが、閉塞石の構築状況や玄室の形態、人骨・遺物の出土状況からみて数度の埋葬が行われていたと考えられる。

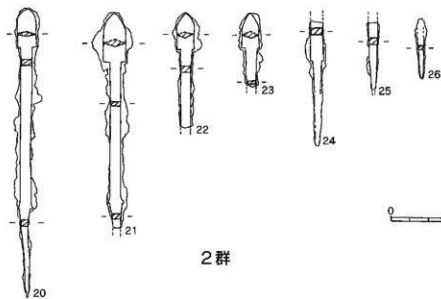
時期については横穴墓の形態や出土遺物からみて6世紀後半頃と思われる。

表1 1号墓出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 胴部最大徑	形態の特徴	技法の特色					備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成	
1	坏身	不明	口縁部は内傾し端部はやや丸みをおびる。受け部は外方に上がる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	1mm~2mm 石英を含む	良好	口縁部から受け部残存
2	壺	9.1 13.5 13.1	口縁部は外反しながら伸び、端部付近で内湾する。端部は丸い。胴部の張りは良く底部は九底である。	回転ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ カキメの後 ナデ酒し	青灰色	石英、角閃石、砂粒をやや含む。	良好	完形 口縁端部を打ち欠いている。



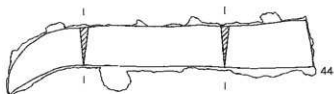
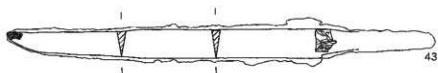
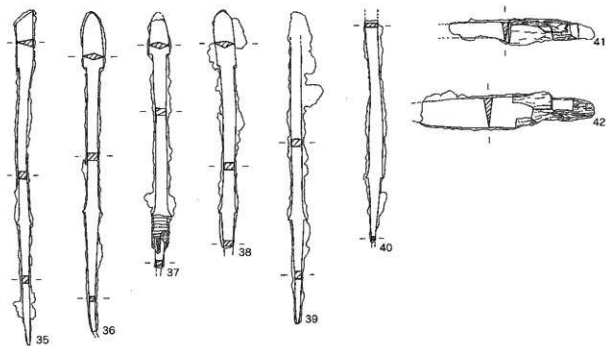
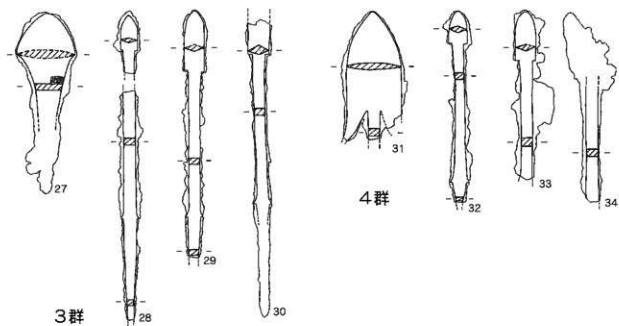
1群



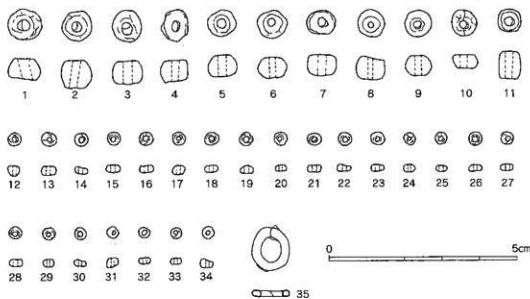
2群



第6图 1号墓出土遗物实测图2(1/2)



第7图 1号墓出土遗物实测图3(1/2)



第8図 1号墓出土遺物実測図4(実大)

表2 1号墓出土鉄器計測表(1)

番号	器種	全長(cm)	刃部長 (cm)	刃部		頸部		茎部		重さ(g)	備 考
				幅(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)				
1	鉄鏃	9.6	6.6	2.3 0.3	4.1 0.45				19.9	基部欠損	
2	鉄鏃	10	3.0	1.0 0.3	6.9 0.45	0.5			10.7	基部一部欠損	
3	鉄鏃	11.5	3.1	0.9 0.3	7.1 0.31	1.3	0.3		12.9	基部一部欠損	
4	鉄鏃	8.4	1.9	0.9 0.45	6.5 0.4				7.9	基部欠損	
5	鉄鏃	4.8	2.4	0.7 0.3	2.4 0.4				4.8	頸部一部と基部欠損	
6	鉄鏃	11.5	1.8	1.1 0.4	6.7 0.35	3.0			11.7	頸部一部と基部欠損	
7	鉄鏃	7.8	1.8	1.0 0.3	6.0 0.5				13.4	頸部一部と基部欠損	
8	鉄鏃	13.7	1.9	1.2 0.25	7.7 0.4	4.1			13.8	完形品	
9	鉄鏃	8.9+α			7.5+α 0.4	1.4 0.4			11.1	頸部と基部が残存	
10	鉄鏃	10.5			7.2 0.3	3.3			7.9	頸部と基部が残存	
11	鉄鏃	10.2			7.6 0.4	2.6 0.4			12.7	頸部と基部が残存	
12	鉄鏃	9.6			5.4 0.3	4.2 0.2			12.8	頸部と基部が残存	
13	鉄鏃	8.9			2.3 0.4	2.6 0.3			9.8	頸部と基部が残存	
14	鉄鏃	6.7			4.6 0.4	2.1 0.31			7.1	頸部と基部が残存、桜樹皮付着	
15	鉄鏃	6.4			2.3 0.4	4.1 0.3			6.8	頸部と基部が残存	
16	鉄鏃	5.7			2.7 0.4	3.0 0.3			4.1	頸部と基部が残存	

表3 1号墓出土鉄器計測表(2)

番号	器種	全長(cm)	刃部長 (cm)	刃部		頸部		茎部		重さ(g)	備 考
				幅 (cm)	厚 (cm)	長 (cm)	厚 (cm)	長 (cm)	厚 (cm)		
17	鉄鏃	5.3				3.6 0.4		1.7 0.4		3.9	頸部と茎部が残存
18	鉄鏃	4.3				2.7 0.3		1.6 0.3		4.8	頸部と茎部が残存
19	鉄鏃	3.6				1.7 0.3		1.9 0.3		2.4	頸部と茎部が残存
20	鉄鏃	15.2	2.05	1.0 0.35		8.6 0.35		5.15 0.3		13.7	完形品
21	鉄鏃	11.5	2.6	1.1 0.4		7.5 0.3		1.4 0.3		12.7	茎部欠損
22	鉄鏃	6.1	1.9	0.9 0.4		4.2 0.4				6.3	頸部一部と茎部欠損
23	鉄鏃	3.9	1.8	0.9 0.4		2.1 0.3				3.7	頸部一部と茎部欠損
24	鉄鏃	6.7				2.1 0.4		4.6		3.7	頸部と茎部のみ残存
25	鉄鏃	3.6						0.4		1.6	茎部のみ残存
26	鉄鏃	3.2						0.3		0.8	茎部のみ残存
27	鉄鏃	9.6	2.2	3.1 0.4		7.4 0.3				26.5	頸部一部と茎部欠損 織物が付着している。
28	鉄鏃	15.3	1.9	0.9 0.32		8.0 0.4		5.4 0.3		19.9	頸部一部欠損
29	鉄鏃	13.2	3.2	1.1 0.5		7.7 0.4		2.3 0.3		17.5	茎部欠損
30	鉄鏃	15.8	1.9	1.1 0.5		7.9 3.5		6.0		17.1	刃部一部欠損
31	鉄鏃	6.8	6.8	2.9 0.4		1.5 0.5				17.0	頸部一部と茎部欠損
32	鉄鏃	10.1	1.7	0.9 0.4		7.3 0.3		1.1 0.25		10.7	茎部欠損
33	鉄鏃	8.9	2.6	1.1 0.4		6.3 0.5				15.4	頸部一部と茎部欠損
34	鉄鏃	6.5						0.45		15.6	頸部だけの残存 刀子の一部が付着している。
35	鉄鏃	17.7	3.1	0.4 0.4		8.3 0.4		6.3 0.4		24.9	完形品
36	鉄鏃	16.9	2.9	1.1 0.4		7.6 0.4		6.4 0.3		18.0	茎部一部欠損
37	鉄鏃	13.1	1.8	1.1 0.4		8.5 0.4		2.8 0.35		14.8	刃部と茎部の一部欠損 関節部に桜樹皮残存
38	鉄鏃	12.6	2.9	1.0 0.4		7.8 0.45		1.9 0.35		15.1	茎部が欠損
39	鉄鏃	16.1				9.8+ α 0.4		5.5 0.4		18.1	刃部の形態が不明
40	鉄鏃	11.7				8.4 0.3		3.3 0.2		11.7	刃部欠損
41	刀子	7.8	3.2	1.1 0.4				4.6		10.1	茎部に鹿角が残存
42	刀子	9.2	4.8	1.6 0.5				4.4		23.6	茎部に鹿角が残存
43	刀子	22.9	16.8	1.05 0.45				6.1		57.3	刃部先端に織物が付着 茎部に木質残存
44	鎌	16.2		2.0 0.4						59.0	完形品

表4 1号墓出土玉類・銅製品計測表

番号	種類	材質	色調	長径(mm)	短径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	備考
1	丸玉	ガラス	藍色	9.0	8.0	3.0	6.0	0.6	
2	丸玉	ガラス	藍色	8.0	8.0	2.0	7.5	0.6	
3	丸玉	ガラス	藍色	8.0	8.0	2.0	6.0	0.6	
4	丸玉	ガラス	藍色	8.5	7.0	2.0	6.0	0.5	
5	丸玉	ガラス	藍色	8.0	7.0	2.0	5.5	0.4	
6	丸玉	ガラス	藍色	7.5	6.0	2.0	5.5	0.5	
7	丸玉	ガラス	藍色	7.5	6.0	2.0	6.0	0.4	
8	丸玉	ガラス	藍色	7.0	7.0	1.0	6.0	0.5	一部欠損
9	丸玉	ガラス	藍色	7.0	7.0	1.8	5.0	0.4	
10	丸玉	ガラス	藍色	6.5	6.5	2.0	3.5	0.3	
11	丸玉	ガラス	藍色	6.0	6.0	2.0	7.5	0.5	
12	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.5	3.5	0.1	
13	小玉	ガラス	水色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
14	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
15	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
16	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
17	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.5	0.1	
18	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
19	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
20	小玉	ガラス	水色	3.5	3.5	1.5	1.5	0.1以下	
21	小玉	ガラス	水色	3.5	3.0	1.0	2.0	0.1	
22	小玉	ガラス	水色	3.5	3.0	1.0~1.5	2.0	0.1以下	
23	小玉	ガラス	水色	3.5	3.0	1.0~1.2	2.0	0.1	
24	小玉	ガラス	水色	3.5	3.0	1.0	2.0	0.1以下	
25	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	2.0	0.1以下	
26	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	2.0	0.1以下	
27	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.2	1.5	0.1以下	
28	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.2	2.0	0.1	
29	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	2.0	0.1	
30	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	1.5	0.1以下	
31	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	2.5	0.1	
32	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0~1.5	1.5	0.1以下	
33	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	1.5	0.1以下	
34	小玉	ガラス	水色	3.0	3.0	1.0	2.5	0.1	
35	銅製品	銅		1.1	0.9	0.7		0.3	用途不明である。

2号墓

1. 立地・調査前の状況

2号墓は、調査区の中央やや北側に立地し、南東方向に開口する。標高は玄室床面で30.8m、前庭部で31.1m、玄室主軸方位はN-50.5°-Eを示す。全長は約3.4mで、ほぼ全容を保っていた。

調査以前は残りがよかったが、遺構検出作業中に玄室天井部が陥没した。

調査は、前庭部及び墓道の確認、閉塞施設の調査・除去を行った。その後、玄室内の崩落埋土の除去作業を行い、遺物、礫床施設など玄室形態の調査を実施した。

2. 規模・構造 (第9図)

1) 前庭部、羨門部

前庭・墓道部は、長さ1.7m、幅は床面で1.0~1.2mである。床面はほぼ平坦であるが前庭部付近は約10cmの掘り込みを持ち、閉塞石の設置施設としている。

埋土は6層確認された。1・2層は墓道埋土で、3~5層が閉塞埋土、6層が閉塞埋土と横穴墓構築時の残土が残ったものと考えられる。

土層観察の結果、追葬は確認されなかった。

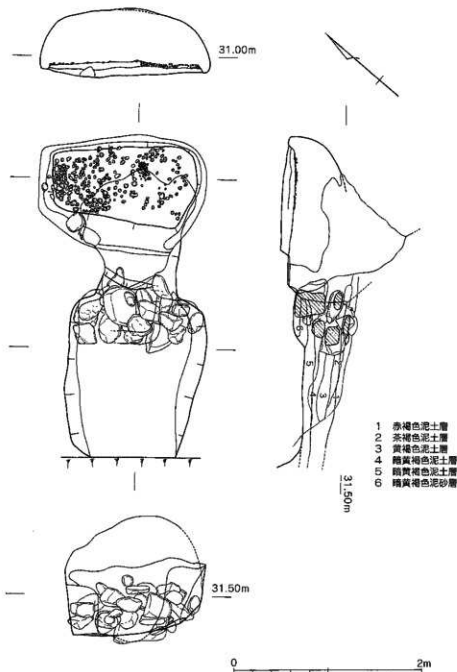
閉塞施設は、地山礫を使用して構築している。大型の礫で羨門部を覆い、その隙間を小型の小礫で補填している。

羨門部は崩落していて、旧状を保っていない。現存で、幅0.6m、高さは不明である。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で長さ0.4m、幅0.5mである。天井部は崩落していて、高さは不明である。羨門と羨道の境に約10cmの段差を生じる。床面はほぼ平坦である。

玄室は、羨道寄りが崩落し、土砂の大量流入が認められるが、比較的残りは良好である。玄門と玄室の境は、約10cmの段差を持つ。天井部はアーチ



第9図 2号墓実測図(1/40)

型、平面形は平入り隅丸長方形を呈している。長さは1.2m、幅1.8m、高さ60cm前後である。床面は最初に約10cmの盛り土を行い、その上に径1～2cmの小砂利を敷き詰め、さらにその上に径5～8cm程度の扁平な河原石を配置して礫床を構築している。この礫床は玄室壁面から10cm前後の空間地を確保して構築している。排水溝の役割を果たしていたと考えている。



第10図 2号墓出土遺物実測図(1/2)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内 (第10・11図)

玄室からは、一体分の人骨が礫床上から出土した。頭骸骨の出土はなかったが上腕骨・大腿骨・下肢骨が左右それぞれ出土している。

副葬品としては玄室入り口左側から刀子2点が出土している。

1は刃部の一部と基部だけである。また把部には鹿角製装具が残存している。

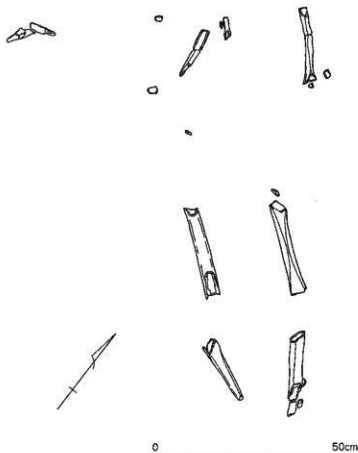
2は刃部だけの残存状態である。

1、2の刀子は玄門近くの西壁側から2本とも近い場所から出土している。接合は出来ないが同一個体である可能性が高い。

2) 前底部

前底部からの遺物の出土はない。

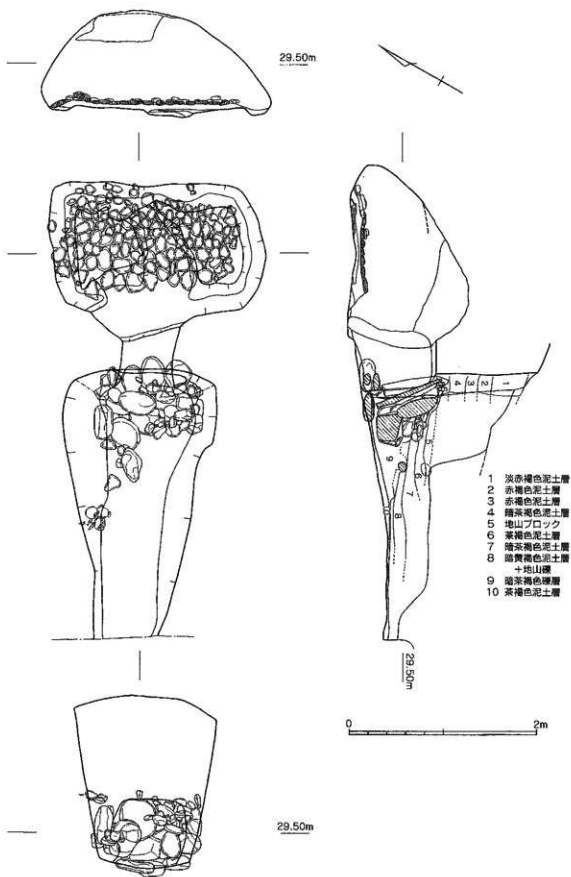
2号墓は、副葬品が刀子2点だけで、土器の出土はないが、玄室や墓道の形態から6世紀前半頃の横穴墓と考えられる。



第11図 2号墓出土人骨実測図(1/10)

表5 2号墓出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	刃部長(cm)	刃部		頸部	基部		重さ(g)	備 考
				幅(cm)	厚(cm)		長(cm)	厚(cm)		
1	刀子	7.9	4.3	1.8	0.4		3.6	16.2	基部に鹿角が残存 2と接合の可能性あり	
2	刀子	7.1	7.1	1.2	0.5			11.2	刃部だけの残存 1と接合の可能性あり	



第12図 3号墓実測図(1/40)

3号墓

1. 立地・調査前の状況

3号墓は、調査区の中央やや南側に立地し、西方向に開口する。標高は玄室床面で29.0mであり、今回調査を行った4基の横穴墓の中では一番低い斜面に位置する。玄室主軸方位はN-61°-Eを示す。墓道先端部は後世の削平に遭い、一部消滅している。そのため、残存での全長は約4.9mである。

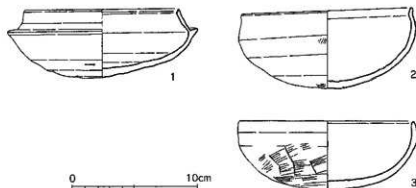
遺構検出作業時、攪乱等により前庭部上部の埋土の残りが悪く、玄室の陥没と思われたため、二次堆積土の除去を行った。その際、閉塞石板石の上部が確認されたため、あらためて残存部分での墓道埋土の確認を行った。

調査は、前庭部及び墓道の確認・掘り下げ、閉塞施設の調査・除去を行った。閉塞石除去後、玄室内の崩落埋土の除去作業を行い、内部施設の調査を実施した。また玄室内からは、比較的残りのよい人骨が確認されたため、九州大学大学院比較文化研究院基層構造講座田中良之教授の協力を得て、人骨の実測・取り上げを行った。

2. 規模・構造

1) 前庭部・羨門部 (第12図)

前庭部・墓道は長さ2.65mであるが、墓道先端部は後世の開発によって、一部削平を受けている。幅は羨門部付近で、肩部1.65m、床面1.0m前後、墓道先端部で肩部0.7m、床面0.5mである。床面はほぼ平坦で、墓道中央付近から玄室方向に向かって、緩やかに下降する。



第13図 3号墓出土遺物実測図1 (1/3)

埋土は10層確認した。

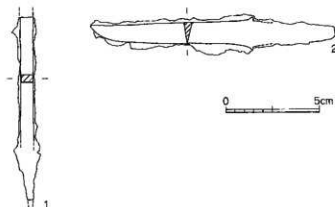
1～3層は後世の自然堆積と思われる。

2層は風化現象がみられる。

4～6層は、墓道埋土と思われる。各層とも比較的粘りがあり、硬くしまっている。4層は風化現象がみられる。

7～9層も墓道埋土で、閉塞石を覆うことから閉塞埋土と思われる。ほぼこの層群で、閉塞石を覆っている。

10層は墓道床面のほぼ全域に薄く堆積している。比較的やわらかい埋土で、横穴墓構築時か埋葬時の残土であろう。



第14図 3号墓出土遺物実測図2 (1/2)

墓道埋土の観察では、追葬に伴う土層の掘り込み等の痕跡は確認できなかった。

閉塞施設は、4枚の安山岩板石と、河原石・地山礫を組み合わせで羨門部を覆っている。まず安山岩板石4枚で羨門を塞ぎ、その後、板石前面を地山礫等で覆い、閉塞施設としている。

羨門部は残りがよく、高さ0.75m、幅0.7m前後である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

2) 羨道・玄室

羨道は床面中央付近で幅0.55m、長さ0.5m、高さ0.85mである。床面は玄室に向かって8°の角度で緩やかに下降する。また、羨道と玄室の境、玄門部分で約10cmの段差を持ち、玄室部分が一段低く構築されている。

玄室は天井部の左半分が崩落しているが、比較的残りは良好である。玄室の形態はアーチ型、平入り長方形を

呈している。玄室床面中央での長さは1.56m、幅2.27m、高さ1.05m前後である。

床面は壁の周囲と中央部分を掘り込み、排水施設としている。礎床施設は、床に約10cmの盛り土を行い、その上に径10~20cm前後のやや小型扁平河原石を敷き詰めている。河原石の一部には赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。礎床施設は玄室中央部分に構築しており、壁際の周囲は15cm前後の空間地を確保している。

3. 遺物の出土状況

1) 前庭部 (第13図)

墓道中央の左側肩部で、須恵器坏身1点、土師器碗2点が配置された状態で出土した。葬送儀礼を行ったと思われる。埋土の状況から、追葬時或は追葬後と思われる。

1は、須恵器坏身で受部から立ち上がりにかけて内傾する。口縁端部は内側に若干の段をもつ。立ち上がり下方に明瞭な段をもち、受部は外側上方に上る。調整は回転ヘラケズリと回転ナデを施している。器壁はやや薄く、6世紀中葉~後半の早い時期の所産と考えられる。

2・3は、土師器碗である。2は口縁部が内傾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は丸みをおびる。3は口縁部がやや内湾しながら直行し、端部は丸い。底部はわずかに丸みをおびる。調整はともに回転ヘラミガキとナデを施している。出土状況から1の遺物に併行する時期と考えられる。

2) 玄室内 (第14図)

玄室内からは2体分の人骨が検出されている。頭位は、最初の遺体が北向き、追葬時の遺体が南向き、互い違いに埋葬されている。副葬品は鉄鎌1本、刀子1本が出土している。

1は鉄鎌で鎌身部の欠損により形態は不明である。頭部から茎部が残存しているが、関節部に関しても錆の為不明である。

2の刀子は完形品である。把部に木質が一部残存している。

1、2ともに玄室中央部より、やや西側の礎床上から出土している。

以上、出土遺物・横穴墓の形態などからみて、当横穴墓の構築・使用時期は6世中葉~後半と考える。



0 50cm

第15図 3号墓出土人骨実測図(1/10)

表6 3号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)		形態の特徴	技法の特色					備考
		口径	器高		内面	外面	色調	胎土	焼成	
1	坏身	12.2	5.4 15.1	たちあがりは内傾しながら伸び、端部は内傾する段をもつ。受け部はやや外方に上がる。受け部の端部は丸みをもち底部は深く丸みをもつ。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	淡い青灰色	1mmの石英と2mm-3mmの長石を含む。	やや不良	3分の2残存
2	埴	13.35	6.1 14.1	口縁部は内湾しながら伸び、端部は外湾し丸い。底部は深く丸みをもつ。	器面磨減の為調整不明	ヘラミガキ	赤褐色	石英と角閃石を多量に含む。	良好 やや軟質	3分の2残存 土師器
3	埴	13.8	5.4 13.8	口縁部は内湾しながら伸び、端部は丸い。底部は深く丸みをもつ。	器面磨減の為調整不明	ナデ ヘラミガキ	赤褐色	1mm前後の石英と角閃石と金雲母を含む。	良好 やや軟質	3分の2残存 土師器

表7 3号墓出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃部		頭部	茎部	重さ (g)	備考
				幅 (cm)	厚 (cm)				
1	鉄鏃	9.7				7.0+ α 0.5	2.7+ α	11.4	頭部と茎部だけの残存
2	刀子	13.0	8.7	1.1	0.3		4.3	28.1	茎部一部欠損で木質が残存

4号墓

1. 立地・調査前の状況

4号横穴墓は調査区南側斜面、3号墓の約4m南側に位置し、西側方向に開口する。全長は4.75m、標高は前底部で約32.5m前後、主軸方向はN-67.5°-Eである。調査以前は墓道、前底部とも上部の一部削平はあったと思われるものの、残りは非常に良好であった。玄室内は天井部の崩落がみられた。

調査は、まず前底部プランの確認を行い、次に墓道埋土の確認・掘り下げ、閉塞施設の調査・除去を行った。その後玄室内の天井部崩落埋土の除去作業を行い、遺物、礎床施設などの調査を実施した。また玄室内からは、人骨が確認されたため、九州大学大学院比較文化研究院基層構造講座田中良之教授の協力を得て、人骨の実測・取り上げを行った。

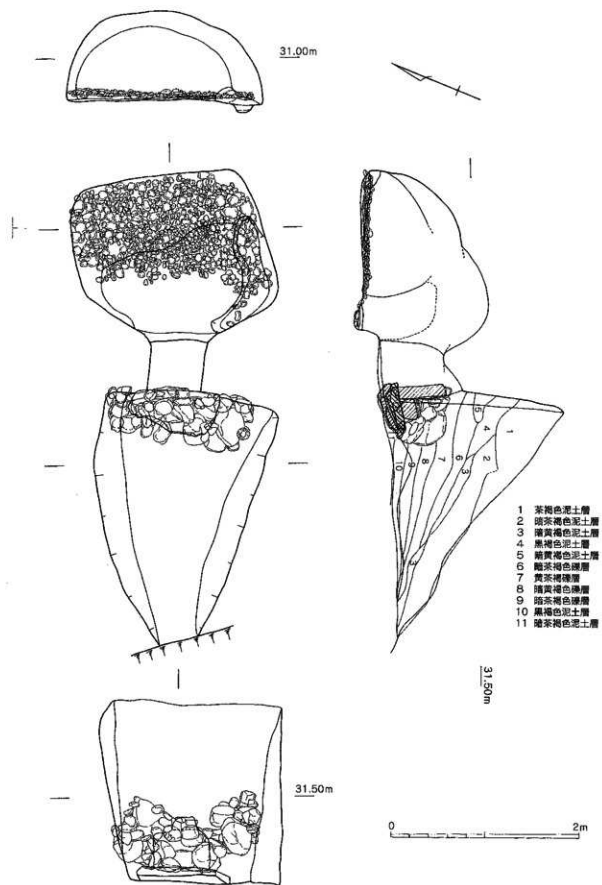
2. 規模・構造

1) 前底部、羨門部 (第16図)

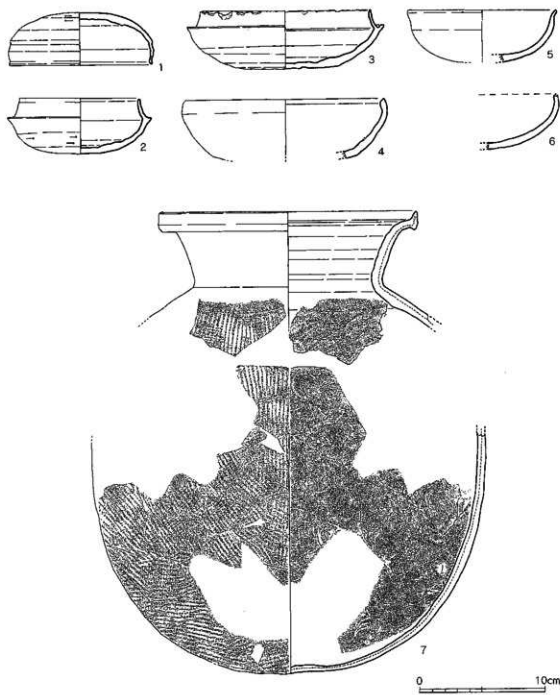
前底部は長さ約2.67m残存し、幅は羨門付近で上場約1.8m、下場約1.6mである。壁高は最奥部の羨門付近で約2.05mである。前底部の床面は緩い凹凸があり、羨門に向かって約10°の傾斜で下る。形状は羨門部に向かいながら広がり、逆台形状を呈する。

埴上は、11層確認した。1~3層は後世の二次堆積と考えられる。4~6層は風化層。7~9層は墓道埋土と思われる。各層とも比較的ソフトで粘質である。閉塞埋土と思われる。11層は墓道床面に薄く堆積している。比較的やわらかい埋土で、閉塞石床面に堆積していることから、横穴墓構築時か埋葬時の残土であろう。墓道埋土の観察では、追葬に伴う土層の掘り込み等の痕跡は確認できなかった。

羨門部分は、若干崩落しているが、幅0.57m、高さ0.67mである。



第16圖 4号墓实例图(1/40)



第17图 4号墓出土遗物实测图1 (1/3)

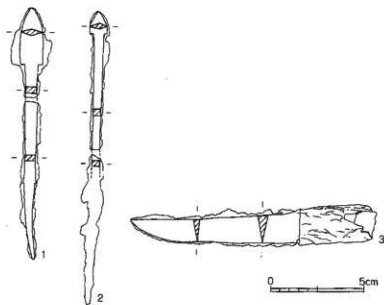
表 8 4号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴部最大径	形態の特徴	技法の特色					備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成	
1	土壺	11.4 4.1 11.4	口縁は外湾しながら伸び、 端部は外傾する段を持つ。 天井部は、やや高く丸みをおびる。 外面にうすい稜が見られる。	回転ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	石英、角閃石、 砂粒を含む	良好	完形
2	坏身	9.6 4.4 11.45	たちあがりは内傾して伸び、 端部は丸い。受け部は外方に 伸び、端部は尖り気味。 底部はやや深く若干丸みをもつ。	回転ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	石英、角閃石、 砂粒を含む	良好	完形
3	坏身	13.5 4.6 15.6	たちあがりは内傾して伸び、 端部は丸い。受け部は外方に 伸び、端部は丸い。底部 はやや浅く水平である。	回転ナデ 調整ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	2~4mm程度 の石英と 砂粒を含む。	良好	口縁端部を全体的に打ち欠いている。 完形
4	埴	15.7 16.3 4.7以上	口縁部は内湾しながら伸び、 端部はやや丸みをおび内が で段をもつ。	ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	淡褐色	石英、角閃石、 長石を含む	良好 やや軟質	土師器 4分の1残存 反転復元
5	埴	11.8 12.0 4.0以上	口縁部はやや内湾しながら 伸び、端部はやや丸みをおび、 端部付近で外反し丸みをもつ。 底部はやや丸い。	ナデ ヘラミガキ?	ナデ ヘラミガキ	赤褐色	石英、角閃石、 長石を含む。砂粒 を含む。	良好 やや軟質	土師器 4分の1残存 反転復元
6	埴	不明	口縁部は内湾しながら伸び、 端部は丸みをもつ。底部は やや浅く丸みをもつ。	器面磨減 の爲調整 不明	ナデ ヘラミガキ	赤褐色	角閃石、長石 を含む。	良好 やや軟質	土師器 4分の1残存
7	壺	9.8 不明 14.8	口縁部は外反しながら伸び、 端部は上方に伸び、やや丸み をもつ。端部内面に段をもつ。 胴部は球形をなし底部は丸い。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ 回転のカキメ	青灰色	1mm程度の 石英を多量 に含む。	良好	上層の2次堆積から出土 反転復元

閉塞施設は、羨門部を覆うように構築されている。最終埋葬時のものであり、それ以前の埋葬時の様相は残していない。閉塞石には人頭大の河原円礫・地山礫と安山岩板石1枚を使用している。最初に安山岩板石で羨門部を塞ぎ、その後、河原円礫と地山礫で板石を固定するように羨門部全域をほぼ覆っている。羨門部前面の床面には踏石あるいは、追葬時に倒されたものか判別できない板石1枚を検出した。

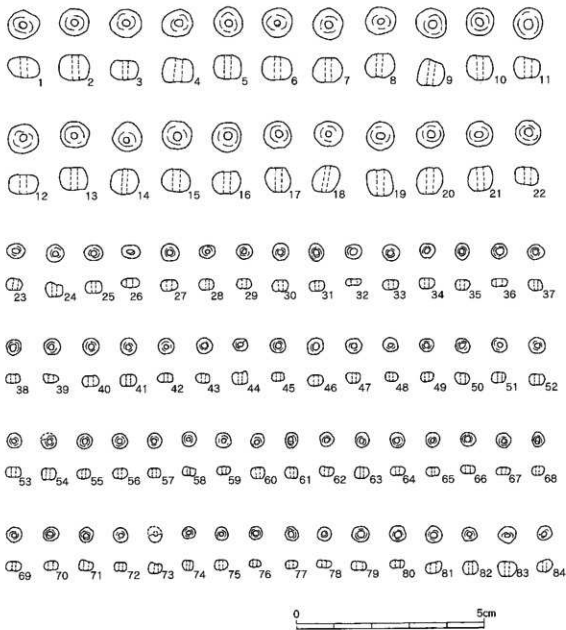
2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.58m、長さ約0.36m、高さは中央部で0.54mである。床面は約10°の傾斜で、玄門に向かって緩やかに下降していく。玄門



第18図 4号墓出土遺物実測図2 (1/2)

幅は床面で0.60mである。女室は天井部が崩落しているが、天井部は残存状況からアーチ形、平面形は平入り隅丸形状を呈し、長さ1.7m、幅2.18m、推定高約1.05mである。埋葬施設は床面に5～8cm程度の盛り土を女室全面に行い、その後7～8cm程度の河原石を敷き詰め、さらにその上に玉砂利を敷いて礫床を構築している。右側壁沿いには排水施設を設けている。礫床には枕石を左右に配置し、左側枕石は玄門側に配していることから北側に、右側枕石では南側に頭部をおいていたと考えられる。



第19図 4号墓出土遺物実測図3(実大)

3. 遺物の出土状態

1) 前庭部 (第17図)

前庭部からは須恵器の坏身2・坏蓋1・壺1・土師器埴3点が出土している。1・2の須恵器の坏身・蓋はセツで閉塞施設内に配置されている。3～7は埋土中からの出土である。

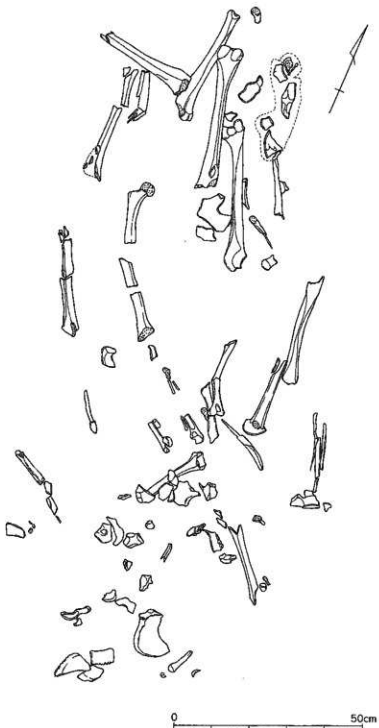
1は須恵器坏蓋である。口縁部はほぼ直下にのび、端部は外反する段をもつ。天井部は高く丸みをおびる。

2は須恵器坏身である。受部から立ち上がりは、内傾しながら伸び、端部はやや丸い。受部は短くやや外上方にのびている。底部はやや深くやや丸みをおびる。受部や立ち上がりの形態から、後述する3の遺物より古い様相を呈し、6世紀中葉の所産であるが、出土状態等により、再利用の可能性をもつ。

3は須恵器坏身で、口縁端部を打ち欠いた状態で出土した。受部から立ち上がりは、内傾しながら伸び、端部は若干丸みをもつ。受部は短くやや外湾している。底部はやや浅くほぼ水平である。3の坏身は、径が2と比較するとやや大きくなるため追葬時の遺物と考えられる。また、口縁端部を打ち欠いていることから儀礼祭祀の様相を呈し、6世紀後半の所産と考えられる。調整は1～3ともに回転ヘラケズリと回転ナデを施している。

4～6は土師器埴である。4・6は口縁部が内湾しながら伸び、端部は丸みをおびる。5は口縁部が内湾しながら延び、端部は外湾し丸みをおびる。底部は残存状態があまり良好でないが、形態から丸みをおびると考えられる。ともに調整は、ナデとヘラミガキを施している。時期については、6世紀後半の所産と考えられる。

7は壺で二次堆積土内の出土である。口縁部は外湾しながら外側に開き、口縁端部は直立し、端部内面は段をもつ。胴部は球形になり、底部は丸みをおびる。胴部外面はタタキを施し、内面は工具による同心円タタキが施されている。時期については、出土状況より6世紀後半の所産と考えられる。



第20図 4号墓出土人骨実測図(1/10)

2) 玄室内 (第18・19図)

玄室内は天井部から玄門にかけて崩落のため、多量の土砂が流入していたが、清掃後に鉄器、玉類、人骨が出土した。鉄鍬は2本で、玄室右側奥壁礎床より出土している。

1の鉄鍬の鍬身部の形態は長三角式になる。鍬身関節部は両角式になり、関節部には台形鬩を造る。このタイプの鉄鍬は1号墓からも出土している。2の鉄鍬は、鍬身部の形態が三角式になる。鍬身関節部も両角式になる。しかし、この2の鉄鍬は全体的に造りが細く明らかに1の鉄鍬とも、1号墓から出土している鉄鍬ともタイプが違う。3は鹿角製装具刀子である。完形で把部の一部を欠損している。玄室東側の奥壁近くから出土している。

玉類は土壌洗浄時に丸玉22点、小玉62点検出された。いずれもガラス製である。

人骨は3体分あり、2体は互い違いに配置され、もう1体は北側によせられていた。玄室側壁北側に1体、玄室奥壁1体、玄室中央部に頸部を左側にする形で1体配置されている。前述の2体分については追葬時にかたづけられたものである。

以上のことから、前庭部では追葬ラインは確認できなかったが、閉塞板石が倒されていることや玄室の人骨の配置形態や遺物出土状況から少なくとも2回以上の追葬が確認できる。

横穴墓の使用時期については遺物等からみて、6世紀中葉から7世紀初頭頃と考えられる。

表9 4号墓出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	刃部長 (cm)	刃部		頸部		基部		重さ(g)	備 考
				幅(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)	長(cm) 厚(cm)				
1	鉄鍬	12.7	3.0	1.1 0.4	6.2 0.4		3.5		15.7	頸部の一部欠損	
2	鉄鍬	15.3	1.2	1.0 0.4	6.1 0.4				12.0	頸部の一部欠損	
3	刀子	13.2	9.1	1.2 0.3			4.1		28.9	完形品 基部に鹿角が残存	

表10 4号墓出土玉類計測表(1)

番号	種類	材質	色調	長径(mm)	短径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	備 考
1	丸玉	ガラス	藍色	8.5	7.1	2.2	5.2	0.5	
2	丸玉	ガラス	藍色	8.2	7.5	1.9	6.6	0.6	
3	丸玉	ガラス	藍色	8.2	7.1	2.0	5.0	0.5	
4	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.5	2.0	6.5	0.6	
5	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.5	2.0	6.2	0.6	
6	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.5	1.8	6.5	0.6	
7	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.0	1.9	6.1	0.6	
8	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.0	1.5~2.0	6.1	0.6	
9	丸玉	ガラス	薄い藍色	8.1	7.5	2.0	6.9	0.7	
10	丸玉	ガラス	藍色	8.1	?	2.0~2.5	6.2	0.6	
11	丸玉	ガラス	藍色	8.1	7.9	2.1~2.8	5.6	0.6	
12	丸玉	ガラス	藍色	8.0	?	2.1	4.9	0.5	
13	丸玉	ガラス	藍色	8.0	6.9	1.9	6.0	0.6	
14	丸玉	ガラス	藍色	8.0	?	1.9	6.5	0.6	
15	丸玉	ガラス	藍色	8.0	7.5	2.0~2.5	6.0	0.5	
16	丸玉	ガラス	藍色	7.9	7.4	2.1	5.5	0.6	
17	丸玉	ガラス	藍色	7.5	7.0	2.0	6.1	0.5	
18	丸玉	ガラス	藍色	7.5	6.9	1.5	6.9	0.6	
19	丸玉	ガラス	藍色	7.5	7.1	2.1	6.8	0.5	
20	丸玉	ガラス	藍色	7.5	7.0	2.0	6.9	0.5	
21	丸玉	ガラス	薄い藍色	6.7	6.5	2.0~2.2	6.2	0.5	
22	丸玉	ガラス	薄い藍色	7.0	6.5	2.1	4.9	0.3	
23	小玉	ガラス	藍色	5.0	5.0	2.0	3.1	0.1	
24	小玉	ガラス	藍色	5.0	5.0	1.2	3.9	0.1	

表11 4号墓出土土類計測表(2)

番号	種類	材質	色調	長さ(mm)	短径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	備考
25	小玉	ガラス	藍色	5.0	4.5	1.0	3.5	0.2	
26	小玉	ガラス	藍色	5.0	4.0	1.5	2.5	0.1	
27	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.5	2.8	0.1	
28	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.1	3.0	0.1以下	
29	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.0	2.5	0.1	
30	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.0	3.0	0.2	
31	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.0	2.5	0.1	
32	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.5	2.0	0.1	
33	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.5	2.5	0.2	
34	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.0	3.0	0.1	
35	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.0~1.5	3.0	0.1	
36	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.5	2.0	0.1	
37	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.0	3.0	0.1	
38	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.0	1.0~2.0	2.2	0.1	
39	小玉	ガラス	藍色	4.5	4.5	1.0	2.5	0.1	一部欠損
40	小玉	ガラス	藍色	4.2	4.2	2.0	2.9	0.1	
41	小玉	ガラス	藍色	4.2	4.2	2.0	3.0	0.1	
42	小玉	ガラス	藍色	4.1	4.1	1.5	2.3	0.1	
43	小玉	ガラス	藍色	4.1	4.1	1.5	2.5	0.1以下	
44	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.5	3.8	0.1	
45	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.5	2.2	0.1以下	
46	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	2.0	3.0	0.1	
47	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.5	2.9	0.1以下	
48	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.1	2.5	0.1	
49	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.2	2.3	0.1以下	
50	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.5	3.0	0.1以下	
51	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.2	2.9	0.1以下	
52	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.7	3.0	0.1	
53	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.2	2.9	0.1	
54	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.3	3.0		一部欠損
55	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
56	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	3.0	0.1	
57	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
58	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	0.9	2.5	0.1	
59	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.0	0.1	
60	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	3.0	0.1	
61	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.5~2.0	3.0	0.1	
62	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
63	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	3.0	0.1	
64	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.0	0.1	
65	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
66	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.0	0.1	
67	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	0.9	2.0	0.1	
68	小玉	ガラス	藍色	4.0	3.0	1.5	2.5	0.1	
69	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	0.9	2.5	0.1	
70	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
71	小玉	ガラス	藍色	4.0	4.0	1.0	2.5	0.1	
72	小玉	ガラス	藍色	3.9	3.9	1.5	2.5	0.1	
73	小玉	ガラス	藍色	3.9	3.9	1.5	3.0		一部欠損
74	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.5	2.5	0.1以下	
75	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.0	2.5	0.1	
76	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
77	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.5	2.0	0.1	
78	小玉	ガラス	藍色	3.5	3.5	1.0	2.0	0.1	
79	小玉	ガラス	明藍色	4.5	4.5	2.0	2.2	0.1	
80	小玉	ガラス	明藍色	4.0	4.0	2.0	2.0	0.1以下	
81	小玉	ガラス	緑青色	4.5	4.5	2.0	3.0	0.1	
82	小玉	ガラス	緑青色	4.1	4.1	1.1	3.8	0.1	
83	小玉	ガラス	深緑	5.0	4.5	1.0	4.0	0.2	
84	小玉	ガラス	深緑	4.0	4.0	1.0	3.5	0.1	

第4章 出土人骨について

上ノ原横穴墓群出土人骨について

舟橋京子* 田中良之**

(*九州大学大学院人文科学研究院)

**九州大学大学院比較社会文化研究院)

1. はじめに

大分県下毛郡三光村(現大分県中津市三光)に位置する上ノ原横穴墓群は、1980年代に調査が行われ、横穴墓研究、儀礼研究、親族関係研究に大きな成果をあげたことで知られる(大分県教委1989・1991)。2004年に、未調査であった横穴墓群が大分県教育委員会によって調査され、人骨も出土したため、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、田中・舟橋・小田裕樹(現奈良文化財研究所)が現地へ赴き、発掘・観察・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学に搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を記載・報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類学資料室に保管されている。

2. 出土状態

2-1 2号横穴墓

玄室内の北側から左右上腕骨・左右大腿骨・左右脛骨が、長軸を南北にとり頭位を南側にした状態で出土している。左上腕骨南側からは左前腕と考えられる小骨片が出土している。さらに、左大腿骨北側からは上顎左犬歯が礫床面よりやや浮いた位置から出土している。左上腕骨、右大腿骨、右脛骨は前面を上にした状態で出土しており、左大腿骨は背面を上にし、左脛骨は骨間縁を上にした状態で出土している。左下肢は奥壁側に位置し、後面を上にした状態で出土しているが、右下肢との間隔が20cmと本来の解剖学的位置関係にはほぼ近く、片づけによる移動ではなく土砂の流入による移動と考えられる。

以上から、本人骨はほぼ原位置を保っており、頭位を北側にした伸展葬であったと考えられる。なお、右上腕骨東側の羨門付近から鉄製品が出土している。

2-2 3号横穴墓

玄室内の奥壁側と玄門側から2体が出土しており、奥壁側を1号人骨、玄門側を2号人骨とする。1号人骨は、頭位を北にした伸展葬である。玄室内南側の中央より奥壁よりの位置から、大腿骨・脛骨が長軸を南北にした状態で出土しており、左下肢が奥壁側、右下肢が玄門側に位置する。左右大腿骨の近位付近からはそれぞれ左右寛骨片が出土している。左右大腿骨は後面を上にした状態で出土しており、右脛骨は前面を上にした状態で出土している。左寛骨・大腿骨・脛骨は関節状態に近い位置関係を保っているものの、左右寛骨や左右大腿骨の間隔が5cmと非常に狭い。したがって、これらから、1号人骨は片づけられており、しかも仙腸関節がはずれるほど軟部組織の腐朽が進んだ後に片付けられたと推定される。

2号人骨は玄室内南側の玄門部側から頭蓋骨・下顎骨・右鎖骨・左肩甲骨が出土しており、1号人骨の左大腿骨近位付近から右上腕骨が出土している。頭蓋骨は顔面を上にし、下顎骨はオトガイを北にした状態で出土しており、下顎の南側からは軸椎(第2頸椎)と歯牙1点が出土している。下顎骨の東に近接して右鎖骨が長軸を東西にした状態で出土しており、下顎骨の西側からは左肩甲骨と上腕骨が関節した状態で出土している。右上腕骨は、近位を頭蓋方向にし、後面を上にした状態で出土している。玄室内北側からは左右脛骨・腓骨が長軸を南北に揃え近位を南にした状態で出土しており、左下腿骨が玄門側に位置する。右脛骨の南側からは右大腿骨が長軸

を南北にした状態で出土している。左脛骨の遠位側からは左距骨も出土している。右上腕骨西側からは2号人骨の体軸に平行した状態で刀子が出土しており、右上腕骨は本来刀子と平行する状態で埋葬されていたものが、肘部付近への土砂の崩落により遠位側が奥壁側へ跳ねたものと推定される。したがって、これらから、2号人骨は原位置を保っており、頭位を南にとった仰臥伸展葬であるといえる。

以上の人骨の出土状況から、初葬者は1号人骨であり、1号人骨は軟部組織がかなり腐朽した段階で奥壁側へ寄せられ、2号人骨の追葬が行われたと推定される。

2-3 4号横穴墓

本横穴墓からは3体分の人骨が出土しており、奥壁側から1号、2号、3号とする。1号人骨は、奥壁の北側付近から頭蓋骨がまとまった状態で出土しており、頭蓋骨よりもやや南側の2号人骨右大腿骨の西側からは右寛骨が出土している。奥壁沿いの中央付近から左右大腿骨と上腕骨が長軸を南北に揃えた状態で出土しており、さらに南側からは左脛骨が長軸を南北にした状態で出土している。頭蓋骨付近からはガラス小玉が1点出土している。

2号人骨は、玄室内北側の中央よりやや奥壁側から四肢骨が出土しており、玄室内南側からは頭蓋骨が出土している。四肢骨は、1号人骨頭蓋骨の南側から上腕骨が長軸を南北にした状態で出土しており、その西側から左右大腿骨・右脛骨が長軸を南北にした状態で出土している。右脛骨の西側からは左脛骨が右脛骨に直交した状態で出土している。頭蓋骨は最も南壁側から頭蓋冠および下顎右第2大臼歯が出土しており、その北側から上顎骨と歯牙および右側頭骨片が出土している。これらの頭蓋骨よりも15cm玄門側から右寛骨片が出土しており、さらに10cm玄門側からは下顎歯が5点まとまった状態で出土している。本人骨は歯牙が若干散乱して出土しているものの、頭蓋骨・歯牙は玄室内南側に集中しており、下肢骨は玄室内北側から出土していることから、本来南側に頭位をとっていたと考えられる。

3号人骨は玄室内中央付近から頭位を南にした伸展葬の状態で出土している。2号人骨の頭蓋骨の北側から頭蓋骨がやや散乱した状態で出土しており、その北側からは右上肢が出土している。さらに北側からは左右下肢骨がほぼ本来の位置関係を保った状態で出土している。

以上の3体の出土状況から、玄室中央に埋葬され、ほぼ本来の位置関係を保つ3号人骨が最終埋葬者であると推定される。1号・2号人骨はいずれも関節状態になく、先後関係は不明である。1・2号人骨とも、3号人骨の埋葬時には、既に軟部組織が完全に腐朽していたと考えられる。

遺物は、1号人骨の頭蓋付近からガラス小玉が1点出土した以外にも、1号人骨左大腿骨南側から刀子が1点出土しており、3号人骨の寛骨右側からも刀子が1点出土している。

3. 人骨所見

3-1 1号横穴墓出土人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨は右側頭骨の矢状縫合・ラムダ縫合付近および頭蓋底を除く後頭骨が遺存している。矢状縫合は外板が開いており、内板は一部閉じかけている。ラムダ縫合は外板・内板ともに開いている。右上顎骨の歯槽部も遺存している。外後頭隆起はやや発達している。

上肢骨は左上腕骨頭付近が遺存している。下肢骨は左右大腿骨体部が遺存しており、粗線はやや発達している。以上の他に部位同定困難な長管骨片が多数遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、矢状縫合・ラムダ縫合の癒合状況から成年と推定される。性別は、外後頭隆起が発達しており、大腿骨の粗線もやや発達していることから男性の可能性が高いと考えられる。

3-2 2号横穴墓出土人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭部は上顎左犬歯のみが遺存している。上肢骨は左右上腕骨骨体部片が遺存している。下肢骨は左右大腿骨骨体部・左右脛骨骨体部片が遺存しており、大腿骨の粗線はやや発達している。

【年齢・性別】

年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。性別は、大腿骨の粗線はやや発達しているものの、その他の筋附着部の発達度合いは不明であることから、性別の判定は困難である。

3-3 3号横穴墓出土人骨

1号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。

下肢骨の左右寛骨片・左右大腿骨骨体部・左脛骨骨体部片が遺存しているのみである。大腿骨の粗線は発達している。

【年齢・性別】

年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。性別は、大腿骨の粗線が発達していることから、男性の可能性が高いと考えられる。

2号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨は頭蓋底および側頭窩付近を除いてはほぼ完存している。眼窩上隆起・乳様突起および外後頭隆起は発達している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は内板・外板ともに全て開いている。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

∕	M ²	×	P ²	P ¹	C	I ²	○	I ¹	I ²	×	P ¹	P ²	M ¹	M ²	∕
∕	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	×	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	∕

歯牙咬耗度は、栃原（栃原1957）の2°bである。

縦幹骨は軸椎片が遺存している。

上肢骨は右肩甲骨関節窩および肩峰付近と近位側を除いた右上腕骨が遺存している。この他にも右鎖骨片が遺存している。

下肢骨は右大腿骨骨体部片、右脛骨骨体部片、左脛骨骨体部、左腓骨片、左距骨片が出土している。

以上の他に部位同定困難な長管骨片が若干遺存している。

【性別・年齢】

年齢は、歯牙咬耗度から、熟年と推定される。性別は、乳様突起と外後頭隆起が発達していることから、男性と判定される。

【特記事項】

前頭部に赤色顔料が付着している。

下顎左中切歯は、生前歯牙喪失であるが、歯科疾患・歯周疾患による歯牙の脱落に特有な歯槽の低下や歯槽表面の多孔質化は見られない。また、先天性歯牙欠如に特有な空隙歯列も見られない。さらに、転倒などによる外傷性歯牙欠如の好発部位は上顎の切歯部であり、1本ではなく数歯に及ぶ場合が多い。したがって、疾患・先天性欠如・外傷のいずれの可能性も否定されることから、本人骨の下顎左中切歯に見られる生前歯牙喪失は企画的抜歯によるものと考えられる。

【形質的特徴】

本人骨の計測値は、頭蓋最大長183mm、頭蓋最大幅141mm、頬骨弓幅133mm、中顔幅108mm、顔高119mm、上顔高73mm、眼窩幅41mm、眼窩高34mm、鼻幅28mm、鼻高54mmである。これらの計測値から算出された各示数は次の通りである。頭長幅示数77.0で中頭である。コルマン顔示数は89.5で中顔に属する。ウィルヒョウ顔示数は110.2で低顔に属する。コルマン上顔示数は54.9で中上顔に属する。ウィルヒョウ上顔示数は67.6で低上顔に属する。眼示数は82.9で中眼窩に属し、鼻示数は51.9で広鼻である。これらの値はいずれも1980年～1985年調査により出土した人骨群の観察結果（土肥1991）と大きく異なるない。

3-4 4号横穴墓出土人骨

1号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨は後頭骨片および右側頭骨の外耳付近が遺存している。ラムダ縫合は外板が一部閉じており内板は閉じている。

上肢骨は骨頭を除いた左右上腕骨が遺存している。骨体自体は細いものの三角筋粗面はやや発達している。

下肢骨は、右寛骨の大坐骨切痕付近と、左右大腿骨骨体部および左脛骨骨体部が遺存している。大坐骨切痕角は大きい。大腿骨粗線はやや発達しているが、脛骨の骨体は細い。

【年齢・性別】

年齢は、ラムダ縫合の癒合状況から、成年後半以降と推定される。性別は、上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線がやや発達しているものの、大坐骨切痕角が大きく、四肢骨も全体的に細めであることから、女性と判定される。

2号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨は、左右上顎骨の歯槽および口蓋付近、前頭骨の右半分、左右頭頂骨の矢状縫合付近、左右錐体付近および後頭骨のラムダ縫合付近が遺存している。冠状縫合は、外板は閉じているが、内板は開いている。矢状縫合は外板・内板ともに開いている。眼窩上隆起は発達している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	/	/	/	/	C	/	P ²	/	/	/
/	/	/	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	/	/	/	/	/	/	/	/

歯牙咬耗度は、栃原（栃原1957）の2°a～2°bである。

上肢骨は左右不明上腕骨片が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨および左脛骨が遺存している。大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線は発達している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度および縫合の癒合状況から、熟年と推定される。性別は、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線が発達していることから、男性と判定される。

3号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨は、左右上顎骨の歯槽付近、前頭骨の眉間付近、右頬骨の前頭突起、右側頭骨の外耳孔付近、後頭骨の外後頭隆起付近、および右下顎枝を除いた下顎骨が遺存している。眼窩上隆起および外後頭隆起は発達している。歯牙も一部残存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	/	/	I ¹	/	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	/
(M ₃)	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	×	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	(M ₃)

歯牙咬耗度は、枋原(枋原1957)の $2^{\circ}a \sim 2^{\circ}b$ である。

上肢骨は、右肩甲骨片および骨頭を除いた左上上腕骨が遺存しており、上腕骨三角筋粗面は発達している。

下肢骨は、右寛骨の大坐骨切痕付近と左右大腿骨骨体部、および左右脛骨骨体部が遺存している。大坐骨切痕角は大きい。大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線は発達している。

【年齢・性別】

年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。性別は、上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線が発達していることから、男性と判定される。

4. 被葬者間の関係

人骨が出土した横穴のうち、人骨が複数体出土している3号横穴墓と4号横穴墓については、いずれも歯冠計測値を用いた血縁者の推定は困難であった。また、出土人骨の年齢・性別・埋葬順序についても被葬者の世代構成を復元するには情報が不足している。しかし、得られた情報に基づいて被葬者の関係について、いくつかの可能性を検討してみたい。

まず、3号横穴墓であるが、上述の通り1号人骨(年齢不明の男性)→2号人骨(熟年男性)の順に埋葬されており、しかも埋葬間隔は長い。ただ、1号人骨の年齢が不明であるため、1号人骨の年齢によって被葬者間の関係は異なることになる。1号人骨が熟年であった場合、1号人骨と2号人骨は生前には世代差があったと考えられるため、田中の基本モデルⅡ(家長と家長権を継承しなかった子ども)となる。一方、1号人骨が成年以下であった場合、1号人骨と2号人骨がほぼ同世代であったと考えられるため、田中の基本モデルⅠ(兄弟・姉妹)となってしまう(田中1995)。しかし、モデルⅠはほとんどが5世紀代に取まることから、本遺跡の年代を考慮すると基本モデルⅡに相当する可能性が高いと考える。

次に、4号横穴墓であるが、3号人骨(熟年男性)が最終埋葬ということのみが明らかであり、1号人骨(成年後半以降女性)・2号人骨(熟年男性)の順位が不明である。そして、この2体と3号人骨の埋葬間隔は比較的長い。以上の事から、1号人骨が初葬の場合は、1・2号人骨が同世代となる可能性が高く、夫婦とその子という基本モデルⅢ、2号人骨が初葬の場合は、第一世代が2号人骨で1・3号人骨が第二世代となり、父親とその子供たちという基本モデルⅠの可能性が考えられる。

以上は、いずれも可能性の提示のみであり、分析と検証の過程を欠いたものである。しかし、両横穴墓ともこれまで上ノ原横穴墓群で得られた分析結果(田中1991)である基本モデルⅡを可能性として有している点は示唆的であろう。

5. おわりに

以上出土人骨についての記載報告を行ってきた。本遺跡からは、4基の横穴墓から7体の人骨が出土した。これらの人骨は保存状態があまり良くなく、計測が行えたものは男性1体のみであり、1980年～1985年調査時出土人骨群の平均値とほぼ同様な値が得られた。歯牙の遺存状態も良好ではなく、歯冠計測値を用いた血縁関係の推定は困難であった。ただ、2基の横穴墓では以前の分析結果を否定しない様相も認められた。しかし、これらはいずれも情報が不足しており、検証をへたものでないことはいうまでもない。また、3号横穴出土2号人骨の下顎中切歯に全面的抜歯の痕跡が認められた。

最後に、本報告にあたり、大分県教育委員会の友岡信彦氏にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。感謝したい。また、人骨整理においては九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座の岡崎健治・板倉有大・石田智子・城門義廣・山根謙二の諸氏に協力頂いた。記して謝意を表したい。

参考文献

- 土肥直美, 1991: 上ノ原横穴墓群出土の古墳時代人骨について. 上ノ原横穴墓Ⅱ. 大分県教育委員会, 大分.
- 大分県教育委員会, 1989: 上ノ原横穴墓群Ⅰ. 大分県教育委員会, 大分.
- 大分県教育委員会, 1991: 上ノ原遺跡群Ⅱ. 大分県教育委員会, 大分.
- 田中良之, 1991: 上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係. 上ノ原遺跡群Ⅱ. 大分県教育委員会, 大分.
- 田中良之, 1995: 古墳時代親族構造の研究. 柏書房, 東京.
- 栃原 博, 1957: 日本人歯牙咬耗度に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31-4.



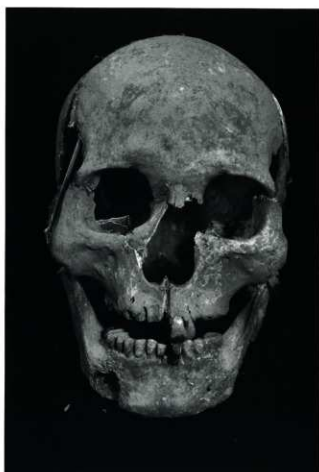
1号横穴出土人骨大腿骨



2号横穴出土人骨下肢骨



3号横穴1号人骨大腿骨



3号横穴2号人骨頭骨(正面観)



3号横穴2号人骨抜歯



3号横穴2号人骨抜歯
(レントゲン写真)



4号横穴 1号人骨上肢骨



4号横穴 2号人骨下肢骨



4号横穴 3号人骨下肢骨

第5章 まとめ

1. 遺構について

今回調査を行った上ノ原横穴墓群の立地する斜面は、前回調査を行った地区とはやや違い、勾配がかなり急な斜面となる。今回の調査では当時、一部で確認されていた横穴墓の規則的な構築形態である古い横穴墓群は下段に、新しい横穴墓群は上段に交互に構築し、グループ化されるという傾向は見られなかった。今回調査を行った横穴墓は、斜面の傾斜の部分的に緩やかな場所を利用した横穴墓であった。

今回の横穴墓の形態の特徴は、以下の通りである。1号墓の玄室の平面プランは隅丸方形、天井部はアーチ型、床面には中央部と周壁の一部に排水溝を設け、その上に人頭大の扁平河原石を敷き詰めている。玄室は大型である。前底部から墓道にかけては削平を受け消滅しているが、長い墓道を持つ横穴墓と推定でき、最盛期の横穴墓の形態である。2号墓の玄室平面プランは平入り隅丸長方形、アーチ型、床面には壁の周囲を残して埋土を行い、その上に小砂利を敷き詰め、小型の礎床を構築している。閉塞石には地山礫を使用し、墓道も短めである。初期横穴墓の形態である。3号墓の平面プランは平入り長方形、天井部はアーチ型、床面には壁の周囲を残して埋土を行い、その上に径10cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。閉塞石は地山礫と河原石・安山岩板石を使用している。2号墓よりやや大型であるが、まだ初期横穴墓の形態に近い様相をわずかながら残している。4号横穴墓の平面プランは隅丸方形、天井部はアーチ型、床面全面に埋土を行い、その上に小型(径7~8cm)の河原石を、さらに玉砂利を敷き詰めている。玄室・墓道等の形態から見ると、当横穴墓は3号横穴墓と1号横穴墓の構築時期の間に構築されたと考える。今回検出した4基の横穴墓の構築順は、最初に2号墓→3号墓→4号墓→1号墓の順であろう。

2. 遺物について

1号墓からは小型の壺と鉄鍬・玉頸が出土した。いずれも玄室からの出土であり、墓道は削平のため、存在しない。土器の年代は6世紀後半頃のもので、横穴墓の形態とも一致する。2号墓からの出土遺物は、刀子1本で時期判別は難しいが、横穴墓の形態から考えて6世紀前半頃と思われる。3号墓では墓道の左肩部に須恵器坏身1・土師器壺2が一括して埋置されていた。葬送儀礼の一例である。須恵器坏の年代は6世紀中葉から後半の初期段階の所産である。横穴墓の形態は初期横穴墓に近い形態であり、追葬も確認されたことからみて、使用時期は6世紀中葉から後半頃と考える。4号墓は玄室内から鉄鍬2・刀子1が出土している。前底部・墓道からは須恵器坏のセット1・坏身1と大型の壺、土師器壺の破片等が出土している。この横穴墓は少なくとも3回の埋葬が確認されている。土器からみる年代間は、須恵器坏のセットが6世紀中頃の時期であり、このセットは閉塞石の前面に意図的に埋置されていた。最終埋葬時の副葬品である。須恵器坏身・壺・土師器壺は墓道埋土内からの出土であり6世紀後半の所産である。また玄室内出土の鉄鍬の1本が7世紀初頭の所産である。この結果、埋葬状況だけで判断すると、最終埋葬の時期は須恵器坏のセットから6世紀中頃となるが、他の土器や鉄鍬の年代間と矛盾することより、閉塞石の前面から出土した須恵器のセットは再利用と考えられる。これらの事例から考えて4号墓の構築時期は6世紀中頃で、7世紀の初頭まで使用していたと考える。

以上、今回調査を行った横穴墓の形態と遺物について触れてきたが、立地条件の悪さから南側で展開する横穴墓群で見られる家族的な領域を持つ集団墓とはやや異なる様相を呈している。

参考文献

- 村上久和編 1989~1991 「上ノ原横穴墓群」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』大分県教育委員会
- 甲斐久義編 2005 「坂手隈横穴墓 坂手隈城跡」『国道212号交通安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会
- 甲斐久義編 2005 「北友田横穴墓群」『片山地区急傾斜崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会

上ノ原横穴墓群出土鉄器についての考察（鉄鏃を中心に）

1. 1号墓から4号墓出土鉄器の概観

今回の上ノ原横穴墓群発掘調査では、多数の鉄器が出土している。これらの鉄器の器種構成としては、鏃、刀子、鹿角製装具刀子、鎌の5種類の鉄器が1号墓から4号墓の横穴墓で副葬されている。まず、各横穴墓について、鉄器の器種構成と追葬の有無について再度確認をしておきたい。

1号墓からは鉄鏃40本と鹿角製装具刀子2本、刀子1本、鉄鎌1本が出土している。鹿角製装具刀子は第2、第4支群鉄鏃と共に出土していることから、鉄鏃とのセットで副葬された可能性がある。鉄鎌は各支群から離れて出土しており、明確にどの鉄器とセットを成すかは不明である。また、本文中で触れたように、1号墓は閉塞石の構築状況や玄室の形態、人骨・遺物の出土状況から追葬の痕跡が認められ、追葬を行うごとに鉄器が副葬されたと考えられる。また、1号墓では、前庭部の削平により土層での追葬は確認できなかったが玄室内における鉄器の出土状況及び、鉄器が4つの支群に分けられる。このことから推測すると最低3回の追葬が行われた可能性がある。

2号墓からは、刀子の破片が2点出土しており、同一個体である。追葬については前庭部の土層からは確認できなかったことや、副葬品が少ないことから可能性は低いだろう。

3号墓からは、鏃身部分が欠損している鉄鏃1本と刀子1本が出土している。追葬については、2体の人骨が検出されており、最低でも1回の追葬が確認できる。なお、刀子は鉄鏃と同じ位置から出土していることから、セットで副葬された可能性がある。

4号墓からは、鉄鏃2本と鹿角製装具刀子1本が出土している。このうち、長頸式の鉄鏃2本は明らかに形態が異なり、一方は6世紀代の鉄鏃の造りだが、もう一方は7世紀代の鉄鏃の造りに類似している。鉄鏃と鹿角製装具刀子は出土位置が異なる為にセットで副葬された可能性は低い。4号墓においては閉塞石が倒されていることや玄室内の人骨の配置形態および遺物出土状況によって2回以上の追葬が行われたことが確認されており、鉄鏃から見ると追葬の時期差が広い可能性がある。

以上が各横穴墓の概観であり、次に鉄鏃の資料内容が良好な1号墓について検討を加える。

1号墓に副葬された鉄鏃は、出土位置が異なる4つの支群を形成する。各支群における鉄鏃の形式別の構成を見ると、第1支群は鉄鏃19本の内、平根式1本、長頸式18本、第2支群の鉄鏃は7本全てが長頸式である。第1支群と第2支群に関しては、出土状況から、天井部崩落に伴う土砂の流入によって第1支群の鉄鏃が分断され、第2支群を形成したことが想定され、本来は同一支群であった可能性が考えられる。このことは、第1支群と第2支群が隣接して出土していることや、長頸式鉄鏃の形態がほとんど同じであり、鏃身に若干の違いが見られるが、あまり時期差がないことから指摘ができる。次に第3支群は鉄鏃4本の内、平根式1本、長頸式3本、第4支群は鉄鏃4本の内、平根式1本、長頸式3本という構成である。各支群の鉄鏃は、形態の違いがほとんど見られず、時期差があまり認められない。

2. 鉄鏃副葬

1) 鉄鏃副葬の諸研究

では、次に1号墓における鉄鏃の副葬形態に着目していきたい。鉄鏃の副葬については、柳田康雄氏や大澤元裕氏が平根式において同種の鉄鏃を副葬する行為が意図的に行われると述べている（柳田1997、大澤2005）。なお、大澤氏は平根式の鉄鏃副葬は、形態変化をしていくと新しい見解を述べている。また、杉山秀宏氏は、長頸式鉄鏃の出現以降に副葬される鉄鏃は、平根式と長頸式の組み合わせが鉄鏃副葬における基本的な構成となると述べている（杉山1988）。前回の上ノ原横穴墓群の発掘調査においても、鉄鏃に関して様々な副葬形態が確認されている（瀧野1991）。

2) 1号墓の副葬鉄鍔

1号墓に副葬された鉄鍔は、第2支群を除く全ての支群において、平根式1本を複数の長頸式の中に入れて平根式と長頸式という基本的な鉄鍔副葬の構成をしている。さらに、追葬があるにも拘らず平根式と長頸式の両形式ともに、鍔身部の形態が揃えられていることも確認できる。これら、1号墓の鉄鍔副葬に見られる行為は弓矢具における慣習の規則に基づくものであると考えられ、平根式と長頸式という系譜が異なる鉄鍔を組み合わせる副葬を行うことは、平根式と長頸式の鉄鍔に求める副葬品としての意味が異なっていたと思われる。両形式に求められた意味を考えると、平根式は儀礼的な意味を含む「儀仗の矢」として、長頸式は刃部の小型化など新しい要素を含んだ実用的な鉄鍔としての意味があると思われる。

3) 上ノ原横穴墓群における鉄鍔副葬

前回の上ノ原横穴墓群発掘調査において、全横穴墓81基の中で鉄鍔が副葬されている横穴墓は62基である。62基の中で1号墓と同様に平根式と長頸式がセットで副葬されているのが36基、平根式のみ副葬が14基、長頸式のみ副葬が10基である。これらの鉄鍔を副葬している横穴墓においても、平根式と長頸式の鍔身部に関しては、ある程度形態は揃えて副葬を行っている傾向が見られる。また、鉄鍔を副葬している62基の横穴墓の半数が鉄鍔副葬の基本の平根式と長頸式を副葬していることなどを考えると、他の横穴墓に見られる平根式や長頸式のみ副葬形態は、平根式と長頸式を組み合わせる副葬する行為が、何らかの理由から変化したか、鉄鍔の副葬形態が崩れている可能性が指摘できる。

3. まとめ

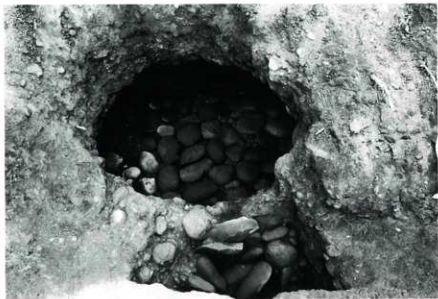
今回の調査において、1号墓の良好な資料を中心に検討することから、鉄鍔の副葬については僅かながら平根式と長頸式の関係を見ることができた。1号墓に副葬された鉄鍔は、何度かの追葬があるにも拘らず平根式と長頸式のセット関係を維持しながら副葬を行っている。また、長頸式の出現以降に見られる鉄鍔副葬など、その時代の副葬行為を取り入れることや、弥生時代終末期から見られる平根式鉄鍔の同種の副葬行為などの古い要因なども残しながら鉄鍔副葬を行っている。このようなことより、鉄鍔副葬は上ノ原横穴墓群全体でも半数以上の横穴墓で行われ、弓矢具の慣習に基づいて鉄鍔副葬が行われることが一般化している可能性を示唆するものである。

最後に、遺物について御教示頂いた行橋市歴史資料館の山中英彦氏、大澤元裕氏の両氏に感謝の意を申し上げます。

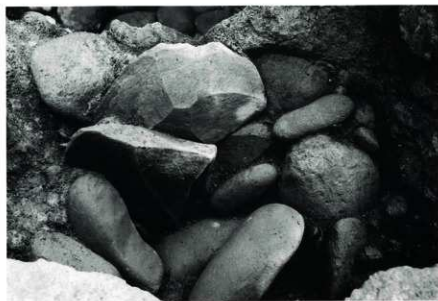
<参考文献>

- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鍔について」『橿原考古学研究所論集』第8集 橿原考古学研究所
湖野令子 1991 「鉄鍔の形式分類と出土状態について」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』 大分県教育委員会
柳田康雄 1996 『徳永川ノ上遺跡Ⅱ・Ⅲ』 福岡県教育委員会
大澤元裕 2005 「弓矢と祭祀 —大型透孔付鉄鍔の偏在性—」 九州古文化研究会第135回例会発表資料
行橋市歴史資料館 2005 「豊の国を象徴する矢」『古代の飾り矢 —豊の国の鉄鍔—』 行橋市教育委員会

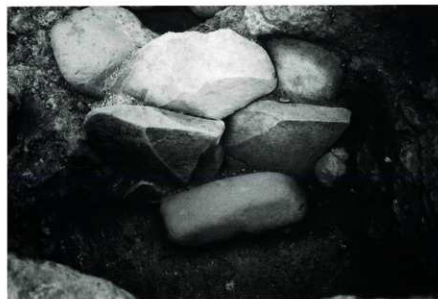
1号墓全景

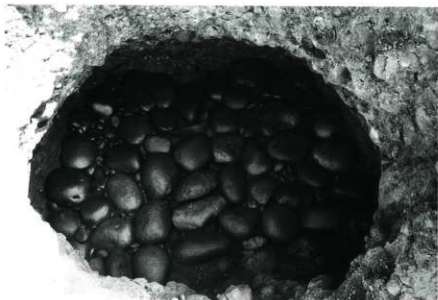


1号墓闭塞石

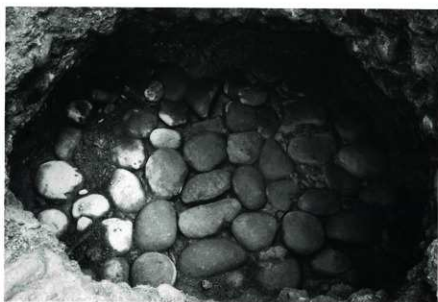


1号墓闭塞石

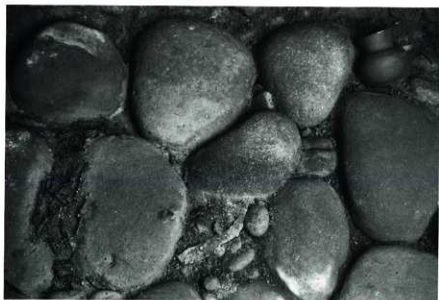




1号墓玄室

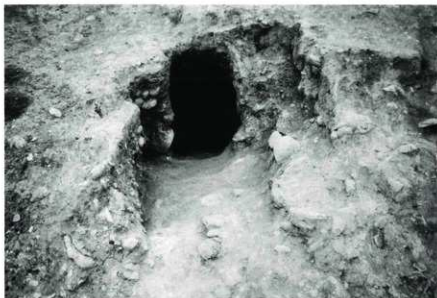


1号墓玄室

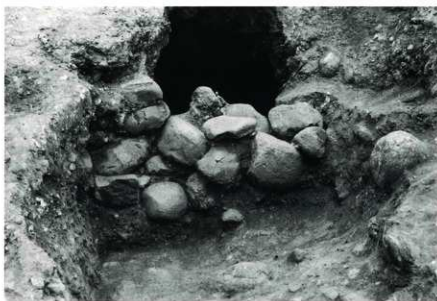


1号墓遺物出土状況

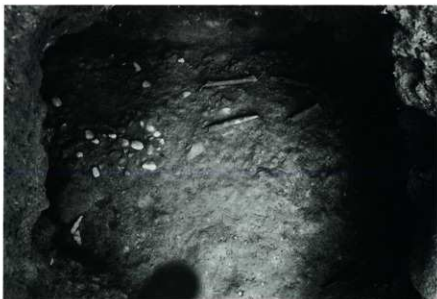
2号墓全景

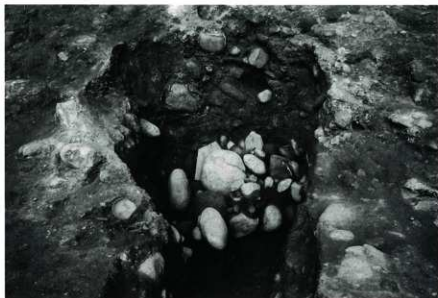


2号墓阻塞石



2号墓玄室





3号墓全景



3号墓闭塞石板石



3号墓遗物出土状况

3号墓人骨检出状况



3号墓人骨检出状况

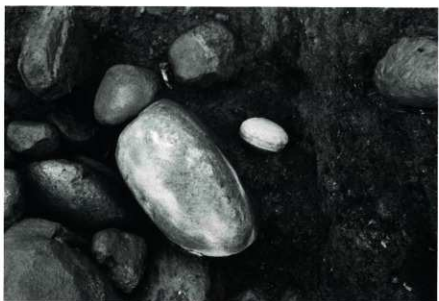


3号墓人骨检出状况





4号墓全景

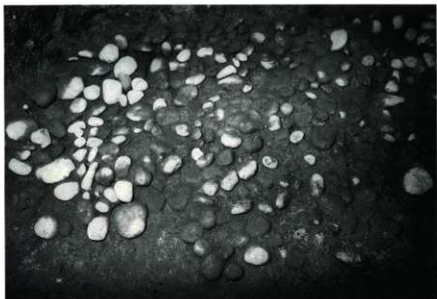


4号墓前底部遺物出土狀況



4号墓閉塞石

4号墓玄室



4号墓人骨檢出狀況



4号墓遺物出土狀況





1号墓出土遗物



3号墓出土遗物



4号墓出土遗物



4号墓出土遗物



1号墓出土铁器 1



2号墓出土铁器



3号墓出土铁器



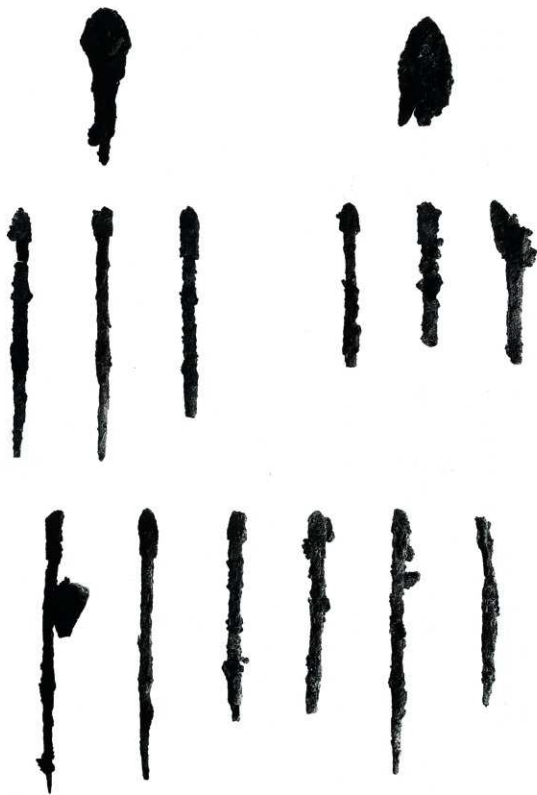
3号墓出土铁器



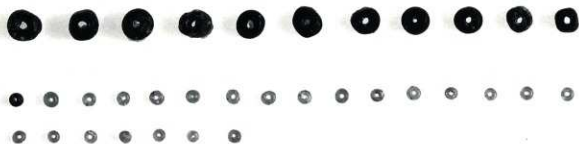
4号墓出土铁器



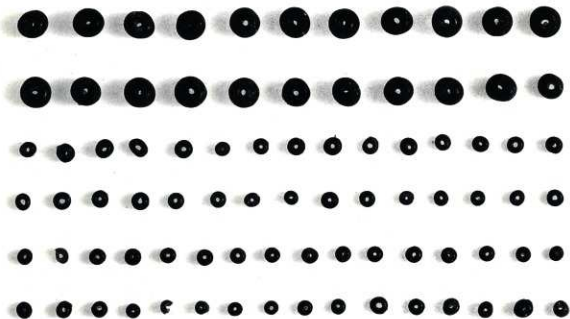
1号墓出土铁器 2



1号墓出土铁器 3



1号墓出土玉類



4号墓出土玉類

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえのはるよこあなほぐん
書名	上ノ原横穴墓群
副書名	国道212号交通安全工事に係る埋蔵文化財調査報告書
巻次	第7集
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	—
編著者名	高橋徹・友岡信彦・吉田朋史・谷尊祥
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地 TEL097-597-5675
発行年月日	西暦2006年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのはるよこあなほぐん 上ノ原横穴墓群	なかつしるんこうさち 中津市三光佐知	101	103001	33° 33′ 37″	131° 11′ 35″	20040701 / 20041022	70	国道212号交通安全工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ原横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	須恵器・鉄・人骨	

要約
<p>上ノ原横穴墓群は中津市三光佐知に所在し、山国川右岸の洪積世台地の急峻な斜面に構築している。この横穴墓群は1980年代に行った調査では、多大な成果を上げている。</p> <p>今回の調査区は前回調査区の北側にあたり、4基の横穴墓の調査を行った。1基は墓道の削平を受けているものの、他は比較的残りが良く、玄室内からは7体分の人骨を検出した。また、須恵器等の土器や鉄器等の副葬品も出土している。構築時期は6世紀前半から後半までの期間である。</p>

上ノ原横穴墓群

国道212号交通安全工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第7集

平成18年2月28日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

印刷 株式会社エポックアート
〒870-0942
大分市羽田984-1
TEL(097)569-1181
